

# オラリオの喧嘩屋

アイズに膝枕されたい侍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オラリオに存在した喧嘩屋。

拳を振るえば鬼、蹴りを放てば悪魔。道行く姿はまさに獣。

肉体に神を宿したかのようなそんな男がとある兎と出会う。

英雄を目指す少年と、最強の喧嘩屋の物語。

# 目次

プロローグ	1
出会い	6
静かな女の思い出	12
喧嘩屋の日常	19
疾風の想い	27
喧嘩屋、キレた!!	34
絶対に敵対してはいけない人類	44
”強い”とは	55
喧嘩屋と炉の女神	62
冒険者登録	74
喧嘩屋の日常2	84
神の宴	90

鍛冶で送る感謝	101
怪物祭	110
喜びの再会	119



# プロローグ

——1人の少年がいた。

オラリオで生まれたその少年を親は少年1人残しオラリオの外へと行ってしまった。

孤児として生きた少年。

しかし、その少年は”強かった”。

1人で生きるための力を持っていた。

しかしそれは理性持つ人の力”知の力”じゃない。生きるためのものを奪い取る程の”暴の力”を有していた。

齢5歳にして1つのファミリアを潰し、そのファミリアの持つ財を全て奪い去り、このファミリアにも属さず神の恩恵ファルナを持たずしてダンジョンへ潜り生きていた。

当然オラリオ中のあらゆるファミリアから危険視されるようになり、懸賞金を賭けられる程にまでなってしまう。

しかし、それでも向かい来る冒険者を片っ端からなぎ倒すその姿はまさに鬼。

程なくしてその少年は”絶対に敵対してはいけない人類”としてオラリオに名を轟かせた。

そんな危険極まりない少年。しかし、その実態は心優しき少年だった。

その暴力性故に勘違いされるが少年の行動原理は全て他人のためのもの。

ファミリアを潰すのもその財を奪うためではなく、命を救ってもらった恩人に仇なすファミリアを粛清したに過ぎない。

口は悪く態度は最悪。それでもなおその純粋な正義の心を理解した一部のファミリアは彼を勧誘するも全て有無を言わずに断り続けていた。

断られてもなおも関わるファミリアも多く、冒険者を、神を、オラリオを湧かせた喧嘩屋だった。

しかし、とある事件をきっかけに少年は忽然と姿を消した。

喧嘩屋死亡説。そんな噂がオラリオ中に流れるのは必然だった。

その事件。それはダンジョン内にて1つのファミリアが壊滅の危機に陥った時の事だった。

闇派閥、<sup>イウイリス</sup>そう呼ばれる過激系ファミリアの策略にハマったそのファミリア。団員のほとんどは息も絶え絶え、立っていることができていたのは4人<sup>??</sup>。

その瞬間、その4人の前に舞い降りた喧嘩屋。それを最後にその少年は姿を消したのだった。

そのファミリアの生き残り4人は少年の恫喝によりその場を離れ急いで地上へ戻っ

た。あらゆるファミリアに声をかけ救助隊を組み、少年を救うべく再度ダンジョン内へ。

しかし、そこに少年はおらず残っていたのはおびただしい人の血と息も絶え絶えになる自分たちを追い込んだモンスターが瀕死でその場に横たわっていたのだ。

死にかけの団員は全員ポーションで体全体を濡らした状態で壁にかけられていて、モンスターが寄り付かないようにモンスター避けのアイテムも置かれていた。

どこへ行つたのか。そんな疑問を持つままに瀕死の団員達を地上へと連れ帰る。

それから数日してとんでもない話を耳にした。

イウイルス  
闇派閥の中のとある一つのファミリアが壊滅したというものだ。そこに所属する団員は全てを息絶え、そのファミリアの主神でさえも殺されていたというものだった。

神殺し。それはまさに大罪だ。

しかし、神々はその事に怒りを持つことは無かった。神々たちが持った感情、それは恐怖。

ファミリアの団員、神を皆殺しにする。そんなことが出来るのは彼しかない。脳裏によぎるは死んだと噂される喧嘩屋。

いつ自身が狙われるのかと気が気ではなかったのだ。

そんな、オラリオに興奮と恐怖を撒いた少年の名は“カグラ”。

彼は今どこで何をしているのか。

そもそも生きているのか、死んだのか。それは本人のみぞ知る――



今日は空が青い。

のどかな平原、そこに流れる川に釣り糸を垂らし俺は釣りをしていた。

「……今日はどれくらい釣れるか」

そんな言葉と同時に竿が大きくしなり曲がる。

すぐさま力ずくで竿を引きあげ釣り糸にかかる魚を見て口角を上げる。

そのまま魚は横に置かれたバケツへとダイブ。片手で魚の口から釣り糸を取り、餌を

つけた川へと投げ込む。

「……なんか面白いこと起きねえかな」

こんなのかな毎日もいいが、やはり刺激が欲しい。

身を隠す生活も疲れた。そろそろ暴りたい。最近そんな思いが胸の中で暴れ回って

いる。

「何かきつかけがあればな……つと」

独り言を呟きつつも竿を引き上げる。

うん、今日は上々だ。



そんなことを思っていた時、

「おーい」

「ん？」

背後からそんな声がかかる。

声の方を向くと髭面の男が立っていた。

「そろそろ馬車出発すんぞー。今日は乗ってかねえのか」カブラ」

「今行くーちよつと待ってる」

「早めに来いよー」

呼ばれたし、そろそろ引き上げるか。

釣り針とバケツを手に取り、立ち上がる。

「さて、行くか」

そうして俺は歩き出した。

## 出合い

「いいいいやあああああああああー！」

少年は走っていた。それはもう死に物狂いで。

白い髪を揺らし、赤い瞳から涙の尾を引きながら全速力で走っていた。

なぜ走る？その答えは少年の後ろ。そこに居たのは人の体躯を優に超える牛頭の化け物『ミノタウロス』。

Lv2の冒険者が相手取れるそんなモンスターに駆け出し冒険者である少年が狙われていたのだ。

勝てるわけが無い。そんな恐怖から少年は逃げていた。

後ろから迫るミノタウロスの蹄が土を踏む、いや土を踏み砕き走り迫る音が耳に入りつつ足を止めずに走り続ける。

「はあ……はあ……なんで……こんな……！」

思わずこぼれる愚痴。

しかし、それも仕方の無いことだ。

本来ミノタウロスがいるはずのない階層。駆け出しが戦い方を学ぶためのチュート

リアルのようなそんな場所にこんな化け物がいる。凶運にも程がある。

そんな逃げ続ける少年だったが、

「つーうわわ……！」

ミノタウロスが一際強く土を踏み締めた衝撃で地面が揺れた。

その勢いで躓き、地面へと転がる少年。

転がった先にあるのは壁。

少年は言わずもがなピンチだった。

「は、ははは……」

思わず乾いた笑いが口からこぼれた。

ケツを地面につけ、巨軀のミノタウロスを見上げる少年のうちにある思いは諦めだつ

た。

そんな時だった。

「んでこんな場所に牛がいんだよ」

「え？」

惚ける少年。

そんな声が聞こえた瞬間、ミノタウロスの胸元に赤い液体を吹き出しながら何かが生

えた。

よく見てみるとそれは刃物。形状からして刀だろう。

赤い液体はミノタウロスの血。吹き出たその血が少年の体にこぼれ落ちるが少年はそれを機にすることなく目の前の光景を見ていた。

「とりあえず……死んどけや」

』

正体不明の声に驚きを見せるミノタウロス。

次の瞬間胸元の刀は上へと動き出し、ミノタウロスの頭までを両断した。

しかし、そこは化け物。これだけの致命傷を負いつつも未だに少し動いている。最後の力、それを使いミノタウロスは後ろにいる敵に目掛けて攻撃を放った。

いや、正確には放とうとした。しかし、拳は届かず一瞬のうちにミノタウロスの体は粉々に切り刻まれたのだ。

その拍子でまたもやミノタウロスの血を浴びる少年。

ミノタウロスが倒れ、その先にいたのは、

「おいクソガキ。死んじやいねえな?」

フードを深く被る男がいた。

◆◆◆

全く、なんでこんなところに牛がいる。

そんなことを心の中で思いつつ、刀を振るい血を飛ばし鞘へと収める。

「た、助けて下さり、あ、ありがとうございます……」

「あ？あー、まあ通りがかっただけだしな。運は良かったじゃんお前。……いや、その様子だと駆け出しか。駆け出して牛と会うとか運悪いのか？まあいい。死んでねえなら重畳だ。とりあえず今日は帰んな」

「は、はい」

そう言うのと、こつちをチラチラとみながら出口の方へと向かい始めた白髪。

「……何チラチラ見てんだよ」

「へ!?あ、いやなんでも……し、失礼しますー」

そう言うつて勢いお辞儀した白髪は踵を返し一目散に立ち去って行った。

その様子を見て兎みたいなやつと思つたのは心のうちに留めておこう。

さて、俺もそろそろ移動しよう。今日の飯代くらいは稼がんと。とりあえず牛の魔石を回収してその場を立ち去ろうと――

「あ」

「んあ?」

――向かう先に立っている金髪の女。

見た事ある。と言うより昔の知り合いだった。

”アイズ・ヴァレンシユタイン”。ロキファミア所属の女剣士。今は“劍姫”なんて2つ名で呼ばれている。

「あ……あの」

「……」

とりあえずバレるのは良くない。話しかけられても無視しつつ金髪の横を通る。

背中に視線を感じるが振り返らない。

程なくして奥から聞こえてくるいくつもの足音。

数十人もの団体がこちらに向かって歩いてきていた。多種多様な種族、装備を見ても1級品。

ほとんど知ってる顔だった。

「そんでよーさつき逃げ回ってた駆け出しがさ」

「ハイハイわかったわよ」

「ミノタウロスは？」

「この階層に逃げたやつで最後だよ。まあでもアイズが飛び出してたし多分もう大丈夫だとは思う」

そんな会話を繰り返り広げるロキファミアの面々の横を素通りしていく。

フィン、リヴェリア、ガレス、ティオネ、ティオナ、ベート。

その他の幹部以外にも久々に見る顔で不覚にも少し懐かしく思ってしまった。

「……そうか。だが、念のため警戒は——っ」

「……？リヴェリア？」

「あ……ああ、すまない。少し考え事を……とりあえず警戒はしておこう」

「ああ、そうだね」

……不味いな。今王サマエルフと目が合ったな。

驚いていたけど気がついたか？……いや、あれから5年は経つ。成長もした。フードも深く被ってる。気づきにくいはずだろ。

そんなことを思いつつ俺は気持ち早めに足を動かしてダンジョンの奥へと足を進めた。

## 静かな女の思い出

「ここは“黄昏の館”。

喧騒が立ちこめる食堂にてとある2人の魔道士が隅の方で静かに乾杯していた。

「まずはお疲れ様と言っておこうか、リヴェリア」

「ああ、ありがとう」

そう言って彼女たち2人はジョッキに入った酒を一口喉へと流し込んだ。

1人は緑の長髪をたなびかせた、エルフ特有の尖った耳を持つオラリオ最高峰の魔道士、<sup>ナイン・ヘル</sup>「九魔姫」、リヴェリア・リヨス・アールヴ。

「それにしてもお前が私に話があると誘われた時は驚いたが……どうかしたのか？」

「それでもう1人。綺麗な灰色の長い髪を持ち両目を意図して閉じているオラリオ最

高峰……いや、最強の魔道士、

「ああ、少し思い出してな。この話をするなら貴方に話そうと思つてな」

「L.V. 7、”静寂”の異名を持つアルフィア。

「思い出した？ 私になにか関係があるのか？」

「関係があるとするならこの場の誰もが関係する話だが1番は貴方だろうと思つてな」



少しの微小をうかべそう言うリヴェリア。

おもむろにジョッキを口に運び喉へと流し込み一息ついて彼女は語り出した。

「貴方はこのオラリオで最強と言うと誰を思い浮かべる？」

「最強？……フレイヤファミリアのところの——」

「そうでは無い。今現在の話ではなく、貴方が生きてきた中での話だ」

そう言われアルフィアはすこし考える。顎に手を当て頭をひねり、

「ゼウスファミリアの……いや、うちのファミリアにいた……いや」

しかし、まとまらない。

最強。その言葉、今現在であればフレイヤファミリアに所属するとある猪人ポアズの男を思

い浮かべる。

彼のLvはアルフィアと同じ7。しかし、今現在ほぼ冒険者としてほぼ引退していると言ってもいい彼女に今の状態で勝算はあるかと言われたら不安も残るほどに彼は強くなっている。

しかし、今現在ではなくアルフィアが生きてきた中での最強と言われると絞りきるこ  
とが出来ない。Lv7が跋扈していた……訳では無いがそれでも昔ならLv8やLv  
9すらもいた。そうなる最強は誰か？その問いに答えるとなると難しいものになる。

「……質問を変えよう。もっとも英雄らしい人は誰だった？」

リヴェリアがそう質問を変えてきた。

英雄。あらゆる困難を乗り越え、あらゆる試練に打ち勝ち、弱きを助け強きをくじく。そんな人々の羨望の的になるようなそんな存在。

誰が英雄らしかったか。その質問は他の人ならば大いに悩むような質問だろう。

しかし、アルフィアの頭には一人の少年が浮かんでいた。

その少年は人々から羨望の眼差しなんて浴びることなんてない。あるのは恐怖の眼差し。困難を乗り越えると言うより困難という問題を振りまく問題児。試練に打ち勝つと言うよりそもそも試練を試練とも思わないようなそんな性格を持つ喧嘩屋。

「カグラ…」

アルフィアはその名を呟いた。

「……やはり貴方ならそう言うと思っていたよ」

リヴェリアの言葉に思わず苦笑が漏れるアルフィア。

「とんでもない男だった。私という強大な悪ですら生かそうとし私から死に場所を奪った。毎度毎度オラリオ中で問題は起こし静かな日は無かったな。英雄とは程遠い男だよ」

「……ではなぜその名を？」

「……何故だろうな。もしかしたら私の中での英雄になつてるのかもしれないな」

懐かしむようにつぶやく口にジョッキを運ぶアルフィア。それを横目で見ながらリヴェリアは口を開いた。

「あの時は驚いた」

そう言うリヴェリアの脳内にはとある光景が浮かんでいた。

『おい……このクソアマ、今日からお前<sup>ロキファミア</sup>らんとここで面倒みる！』

全身が血に濡れた少年のそんな叫びにその場にいたもの全員が言葉を無くしていた。

今まで死闘を繰り広げ死人さえも出した敵……アルフィアを面倒みるというのだ。

驚かないはずもない。

もちろん総じて声を荒らげた。ふざけるな！と。当事者のアルフィアでさえもその

言葉には異を唱えた。

しかし、少年は、

『うるせえ！クソボケが！敗者に口無しだ！文句も異議も反論も受け付けねえ！黙ってめえは何をしかしたのかを理解して償え！何もしねえで必要悪でしたの自己満で死ぬことは許さん！自分勝手も大概にしろや！クソが！』

そんな言葉で一蹴した。

その言葉にその場の誰も口を噤んだ。

『……………いいか、お前はもう逃げんな。英雄になりきれなかったてめえは必要悪なんて楽な道に進んで逃げたんだ。この先はしっかり英雄になってから死ぬ。てめえの目標はてめえでやれ。他人に任せることじゃねえだろうが』

その言葉に今度こそ言葉を無くすアルフィア。

周りの今まで戦っていた面々も喉を鳴らした。

「ほんとに…酷い、漢だ」

「ああ、全くだ。貴方が初めてここに来た時はとてつもなく忌避されていたな」

そう言ってお互い苦笑をこぼす。

「……………それでその話がどうかしたのか」

「……………ああ、今日の遠征の帰りにな。とある一人の男とすれ違ったんだが、その男と目が合って唐突に思い出したんだ」

「……………もしかしたら本人だったかもしれないな」

アルフィアの言葉にリヴェリアは悲しげに口を開いた。

「そう、かもな。……………それだったらどれほど……………」

「リヴェリア」

アルフィアは思わずリヴェリアの背中に手のひらを置いた。

「大丈夫さ。あの男ならどこかで生きてる。あんなゴキブリみたいな男、死ぬほうが難しい。ほら今日は遠征からの帰りだ。たらふく食べ。今日はあのバカの思い出話でも花咲かせよう」

「……ああ、そうだな。それならみんなも呼んでおこうか」

「それがいい」

こうして黄昏の館の夜が更けていく。



「へっ……くしよいッ！ぬあーちくしよう…」

さつきからくしやみが止まらん。

誰かが噂でもしているのか？それならやめて欲しい。

そんなことを思いつつ目の前のモンスターを切り刻む。

「つかいま何時だよ。大分魔石溜まったんじやねえか？」

昼過ぎくらいから潜ってたし、今は夜だとすれば9、10時間くらいは潜ってるか？

そろそろ戻るか。

そうして魔石を回収した俺は踵を出口へと向かった。

「へっ……くしよいつ！くしよいつ！くしよいつ！へっ……くしよいつツツツ!!!  
ぐああああ!!!」

噂してる奴今すぐやめろやツ！

## 喧嘩屋の日常

翌日の朝、じゃが丸を頬張りながら大通りを俺は歩いていった。

昨日はダンジョンから帰り、ギルドに換金ついでにそのロビーで寝かせてもらった。

俺の正体は多くの人には秘密にしてるがギルドの長は俺のことを知ってる。そうじゃなきや冒険者でもない俺の換金なんてしてくれんし、それに雨風凌げる場所も提供してくれるし。

そんなわけで懐も温まり一晩寝て疲れが取れた体を動かしながら悠々と歩いていた。周りを見れば冒険者だらけ。朝からダンジョンに向かうのだろうか。元気があるのはいいことだ。

軽装や重装、大剣、刀、弓……e t c。各々が持つ個性が見えて意外とこういう観察は面白い。

そういえば昨日の兎は無事に戻れたのか。いかにも駆け出しというような風貌だったし、また襲われてお陀仏……なんてことになってなかったらいいが。

そんなことを考えてる時だった。

「あ……」

すぐ近くからそんな声が聞こえてきた。

「あん？」

「え、あ、ど、どうも」

声のした方を向くとそこに居たのは、

「………兎」

「え？」

「お前昨日の兎だろ」

「う、兎？ 僕ですか？」

赤目に白い髪。弱々しい童顔。改めて見るとまさに兎を彷彿させるような見た目をしている。

「なんか用か？」

「え、あ、昨日はありがとう——」

「あーいい、いい、そういうのは。言っただろ。通りがかっただけだつて」

「そ、それでも助けられましたし」

この兎、見た目に反して意外と頑固だな。

「わーっつたよ。礼の言葉くらい受け取っとく。ほらこれでいいだろ」



「え、いやあの…お礼として何か…あ、そうです！今日の夜時間あります！」  
「あ？」

まさかの申し出。自分で言うのもなんだが、俺の見た目は怪しさ満点の目つきの悪いヤバイやつだろ。

なんでこんな突っかかってくる。

「いや、だからそーいうのは——」

「お願いします！」

「……」

ついには頭を下げられてしまった。

思わず無言になる。

まさかここまで強引なやつだったとは。

「…はあ、わーったよ。夜だな？」

「っ！ありがとうございます！」

「へいへい。ほらさっさと行け」

「は、はい！ではまた後で会いましょう！」

そう言つて兎は嬉々とした表情で走つていつてしまった。

今どきの冒険者にしては珍しい礼儀のあるやつだなとは思うが、いかんせん、

「……押しが強いのが苦手なんだよな」

そんな呟きは街の喧騒に飲まれて消えた。



あれからブラブラと街を歩いてた俺はいつものように歓楽街へ来ていた。

別にそういう目的でここに足を運んでいるわけじゃない。ただ、ほぼ日課と言っているほどにとある理由でここに来ているのだ。

それは、

「てことでよ、駆け出しのくせに一丁前に強引だよ」

「ふふ、”カブラ”さんは押しに弱いですからね」

「あ？おめえがそんなこと言える道理はねえだろうが」

「あう……」

目の前に座る金色の髪に獣の耳が生えた狐人ルナールの女。

”サンジョウウノ・春姫”。歓楽街にて娼婦として働いてるらしいが生娘の中の生娘で未だにちゃんと客を取れたことがないらしい。

なんか色々苦労した人生を歩んできたみたいだが詳細は聞いてない。不躰だしな。そんなわけでいつも暇な時は俺はこうしてこの狐娘と話をしに来ていた。

「てことは今日の夜に？」

「みたいだわ。多分飯に誘われんじゃね？」

「ご飯ですか。それは良いことですね」

そう言いにつこりと笑う狐娘。

「何がいいことか。こつちも事情があつてコソコソ生きてんのによ。目立ちたくねんだよな」

「……カブラさんは悪い人なのですか？」

「あー、悪いんじゃない？」

「ふふ、そうですか」

「……何笑つてんだよ」

今の話の流れで笑う要素なんてなかっただろ。

普通ちよつと警戒するところだろなんてことを思う。

「なんでもないです。カブラさんがもし本当に悪い人でも私の中では良い人ですから」

「……あつそ」

そんなことを言われて俺は指で自分の頬をかいた。

まっすぐそんなこと言われると少しばかりこそばゆいな。

そんな時、

『春姫ーいるかいー？』

「!?!」

扉越しに聞こえてくる女の声。

俺は慌てて窓から飛び出し、壁を蹴り屋根へと登った。

「あぶねーな、ほんと」

見つかつても別にいいが、そうするとあの狐娘に迷惑かけるだろうしな。それにまた俺が生きてるとか明るみになつたらまたこの首に懸賞かけられそうだし。

そんなこんなで数分、屋根の上から空を眺めていた時の事だった。

「……………ん?」

視線を感じる。近くにはいない。

感じるのは、

「バベル…」

空高くそびえ立つ巨大な塔。その頂上付近から感じる視線。

まあ、あの女神にはいつかは見つかかりそうだとは覚悟していたが。逆に今まで良く見つからなかつたな。

あの女神が目をつけていた冒険者と知らずに関わつてたとか?となるとあの兎か?有り得なくもない。それ経由で見つかつたか。

まあいい、とりあえずこの気色の悪い視線はどうにかしておこう。

そうして俺はバベルの頂上、そこにいるであろう女神に目を向けた。  
「……………ふう」

程なくして感じていた視線が消えた。どうやら目を逸らしたようだ。  
昔はしつこいくらいに勧誘されてたからな。

今より荒れてたし、思わず我慢できなくなつてビンタしたつけ？懐かしい思い出だ。  
あの時の驚いた顔と言つたら思い出しただけで笑える。

「あ、あのカブラさーん。もう大丈夫ですよー」

考え事をしていたら下から小声のそんな声が聞こえた。

さて、お呼びか。行きますか。

「よつこいしよ…つと」



まさかほんとに彼が生きていたとは。

胸中、そんな思いが駆け巡る一人の美しい女神。

美の女神と言われ、数多の男、神も人も全ての異性を虜にするような美貌を持つその  
女神は先程視界に入れていた一人の男のことで頭がいっぱいになっていた。

あの日、その男を自身のファミリアへと勧誘しようと自ら彼の元へ赴いたこの女神。  
有無を言わずその誘いは断られた。

それからほぼもう躍起になっていた。連日のように彼の元に赴いては勧誘勧誘の日々。

魅了チャームの力を使ったこともあった。しかし、それでも一向に自身になびかないその男に……もう、意地だろう。勧誘という建前を使い振り向かせてみせると少なからず思っていた。

そしてある日のこと、彼から張り手の答えが返ってきた。

——しつこい

その一言とともに自身を見る目は酷く冷たいものだった。

初めての経験だった。普通ならここで、神である私に何を！なんて怒るのが普通だろう。

だが、この美の女神は違った。

「……また、また会えるのね、カグラ」。早く、早くまたその冷たい目で私を……うふふ」

あの日をきっかけにこの女神の変な扉は開かれてしまったのだ。  
俯くその女神、「フレイヤ」の顔は酷く蕩けていた。

## 疾風の想い

「ほんじゃ、そろそろ時間だしここいらで」

「あ、もうこんな時間に…また来てください」

立ち上がった俺にそう声をかけてくる狐娘。

「おう。いい暇つぶしになった。サンキューな」

背中を向けた状態で手を振りながら窓に手をかける。

縁に足をかけ力を込めそのままジャンプ。隣の建物の屋上へと登った。

そのまますすぐダンジョンの出入口に向かう。

集合場所とか時間も決めてなかったが大丈夫だろうか。

「ま、出入口にいりや会えんだろ」

そんなことを呟きつつ足に力を込め速度を上げた。

「………着いた」

数分後。ダンジョンの出入口へと着いた。

早速辺りを見渡してみる。

やっぱこの時間になると自身のフアミリアへ帰っていく冒険者が多い。

この中にあの兎がいるとなるとなかなか見つけづらいな。

背も小さいし小柄だからな。人混みにおったら見つからんぞ。

そんなことを思っていると、

「あー！」

「あん？」

耳に入るその声、直後後ろから服を引っ張られる感覚。

思わずそちらに顔を向けた。

「ああ、いたか」

「お疲れ様ですー！」

そんな風に笑顔で話しかけてくる兎。

……今思えば俺に恐れず話しかけられることに対して少し驚く。

「あいあい。ダンジョンからの帰りか？」

「あ、はい！今日はこんなに」

そう言っただけで帰ってくる袋。中には魔石が入っているんだろう。

駆け出しでここまでとは……こりやなかなか見込みある駆け出しだな。



「あつそ。 んで？この後俺をどこに連れてく気だよ」

「あ、そういえば言つてなかつたですね。 この後夜に”豊穰の女主人”つてところで飯でもどうかかと」

豊穰の女主人……意外と有名な飯所だな。

ただ、意外とあそこつて色んな冒険者が食いに来るとこだし身バレがヤバいが……まあいいか。

「わーつた。 とりあえずお前はギルドで換金でもしてこい。 俺は先に店周辺にいる」  
「あ、はいーわかりました！では、また後でー！」

そう言つて走り去る兎。

元気なのはいいが苦手だ。

嫌いつて訳じゃないが……うーん。

「まあ、先に向かつとくか」



今、1人のエルフはとある男に目を奪われていた。

それは恋や愛ゆえのものでは無い。

「……似ている」

思わずと言つた具合溢れる言葉。

サンダルにふくらはぎあたりまでの丈のズボン。薄い黒のサイズが合わずダボツと  
しているフードがついた服を腕まくりし羽織っているその男。

見た目、歩き方、肌の色……その他にもエルフの彼女の頭に浮かんでいる1人の人物  
と似ている部分が多い。

身長は170と少しだろうか。記憶にあるその男と比べるといささか背が高いが最  
後に見たのは5年ほど前。成長しているのであればそれくらいはあるだろう。

しかし、違う部分もある。

腰に携えた長さの違う2本の刀。記憶にある男は武器など持つてはいなかった。

故に、

「人……違いか」

そう言つて視線を外すエルフの女性。

彼女の頭にある男。それは命の恩人だった。

自身の所属するファミリアを救った男。

毎度毎度騒ぎを起こし、その度にファミリア総出で追いかけてもした。口は悪い、態度  
も最悪。いい印象は持っていなかった。

しかし、オラリオ内の大抗争、“死の七日間”と呼ばれる大きな出来事の時守つても  
らった。

ダンジョン内でファミリア壊滅の危機の時も救ってもらった。  
あの男は凄かった。

しかし、変なプライドがあった。こんなデタラメな男を認める訳にはいかなかった。  
騒ぎは起こす。ファミリアも潰す。そんな男に助けられたことを屈辱に思つてさえも  
いた。

だが、5年前からその姿を突如として消した。そしていなくなつて初めて気づく。  
胸にぽっかりと穴が空いたような感覚。”寂しい”。

どこかであの男との”追いかっこ”を楽しんでいたのだろうか。

思い返すと、ファミリアの総意で引き上げようとしても最後まであの男を追いかけて  
続けたのは自分だった。

仲間からも『楽しそう』と笑われたこともあった。

そんな馬鹿なと一蹴していたが、この感覚を覚えると嫌でも思う。あの男とか関わっ  
ていた自分は生き生きとしていたなど。

「今どこにいるんですか……カグラ」

アストレアファミリアに所属し、豊穡の女主人で働く”リユー・リオン”。

彼女はまだ”英雄”に感謝を伝えられていない。



「行ったか……」

危なかった。

兎が来るまでの間に店の周りの商店で色々見て回っていたらまさかの知り合いと遭遇。長い時間視線を感じていたがようやく行ってくれたようだ。

「にしてもアイツのメイド服か……似合わね」

思わず笑いがこぼれる。

あの厳格な性格の生真面目エルフがメイド服でご主人様なんてことを言ってるんだと思うと爆笑ものだ。

それにしてもメイド服……どこかで働いてるのか？

ファミリアは存続してるみたいだし、抜けた話も聞かない。掛け持ちか？

てか、あいつ以外の面々は元氣してんのか？そう思うと気になり出すのは人の性。後でチラッと様子でも見に行こう。

そんなことをしていると辺りは日も落ちて来ている。そろそろ来てもらいたいもんだが、

「あー！お待たせしましたー！」

そんなことを思っていると駆け寄ってくる兎。

噂をすればなんとやら。

「ああ、待ったわ。おせーよ」

「あう、すいません…」

「別に怒っちゃいねえよ。腹減った。さっさと行くぞ」

「あ、は、はい」

俺が歩き出し、後ろから着いてくる兎。

「……こういうのはおめーが先導すんじゃないの？」

「え？あ、そ、そうですね」

そう言つて小走りで前に出ていく。

ここ、こちらです、なんでカタコトになりながらもエスコートし始めた。

それを見てアホらしくて笑えてくる。

「……ですね」

「……繁盛してんな」

「そうですね。じゃ、早速入りましょうか！」

そう言つて兎は意気揚々と扉を開けた。

## 喧嘩屋、キレた!!

「なるほど、つまりお前はベル兔って訳だ」

「いやですから！兔は付けなくていいんですよ！」

店に入った俺たち。早速料理を食べ始めそこから数十分が経った頃には俺と兔はだ  
いぶ打解けることができていた。

「そののねーちゃん、ベル兔に酒持ってきてくれや」

「あ、はい！」

「いや、僕飲みませんよ!？」

俺の言葉に反応する銀髪をポニテにまとめたねーちゃん。

しかし、兔はそう言ってるねーちゃんを止めてしまった。

「なんだ？俺の酒が飲めないってか？」

「え、いや、あの、その……」

しどろもどろになる兔。

ちよいと悪ノリがすぎたか。

「嘘だ。こいつにじゃなくて俺にくれ」

「わ、分かりました！」

そう言つて厨房に消えていくねーちゃん。

兎はジト目でこつちを見ていた。

「……なんだよ？」

「いいえ、なんでもないです」

いや、ちよいむくれてるやん。

「そんな怒んなや。ただの冗談だろ」

「分かつてますよ」

そう言つて口に料理を運ぶ兎。

まあいいや、それより今俺にはなかなか危ない状況に立たされている。

それは、

「……」

ずっとこつちを見てくる生真面目エルフがいるというね。

すごい眼力。変に意識すると勘のいいあいつなら気づく可能性もあるから自然にい

つも通りにしているが……厳しいな。

てかあいつここで働いてたのかよ。似合わねえ。

「カブラさん、どうかしました？」

「あん?.....いや、なんでもねえよ」

「?そですか」

まあとりあえずは不審な動きでもしてなきやあつちからのコンタクトはなさそうだし、普段通りに行こう。

そう思いつつ、どうぞとそんな一言共に置かれたジョッキを口元に運んだ。

.....それにしてもさつきから変な視線を感じるな。

「そういえばカブラさんってどこのファミリアに所属しているんですか?」

「.....唐突だな」

「あ、いえ、気になっただけなので...」

ファミリアか。生まれてこの方どこにも入ったことはないんだけどな。

「...秘密だな」

「えー、どうしてですか」

「秘密だからだ」

強い口調でそう言うのと渋々と言った形で引き下がった兎。

弱々しい見た目のくせに積極的だなほんと。

それにしてもファミリアか。俺もどこかに入るべきか。

.....まあ、そこはおいおい考えるところ。おいおいと。



そんなことを考えていると、店内に小粋な声が響いた。

「ご予約のお客様、ご来店にゃ！」

団体の予約客か。この時間に来るってことは打ち上げかなにかか？

そんなことを思いつつその予約客たちの方へ視線を向け……次の瞬間に俺は視線を前に戻していた。

なんでこんな日に限って、そんな思いが込み上げてくる。

件の予約客はロキファミア。

最悪のタイミングだ。

「よし、今日は宴や！遠慮せえへんで飲め飲め！」

うるせえ糸目ペッター。

こうなったらさきさきと飲んで食って出るしかないか。

そう思い食べるスピードをあげようと、

「すみません」

「あ？……っ」

「間違いでしたらすみません。聞きますが、どこかでお会いしたことありませんか？」

声をかけてきた人。いや、エルフ。

凜とした声でそんな問いをなげかけてきたのはあの生真面目エルフだった。

「……いや、初めましてだな」

「……」

俺の言葉を聞くも黙ってこちらを見つめてくる。

感じる視線、その視線が一瞬外れた気がした。視線の移り先はカウンターに立てかけた刀か。

そうして生真面目エルフは頭を下げてきた。

「……そう、ですか。すみません人違いのようでした」

「ええよ。そういうことはよくあんだろ」

「……失礼します」

そう呟いたそいつは厨房の方へと姿を消して行った。最後までこちらに目を向けて。

危なかったな。昔は持つてなかった刀を見て人違いと勘違いしてもらえたんだろが、食い方とか飲み方とか座り方とか、そんな細かい部分でバレかけたか。あいつ昔からそういうところやばかったからな。

「あ、カブラさんこの料理美味しいですよ」

「ん？おお、じゃあ皿に取り分けて寄越してくんね」

「わかりました」

そう言っつて料理を取り皿に移してくれる兔。

そうやって自分でも意外と楽しみながら料理を口にしてている時だった。

「そうだ！おいアイズ！あの話みんなにしてやれよ！」

騒がしい店内でもはつきりと響き渡ったその声。

ロキファミアリアのメンツの1人、狼<sup>ウエッセル</sup>人の男の声だった。

「あの話？」

「あれだって！ 帰る途中で何匹か逃したミノタウロス、奇跡みてえに5階層まで逃げたやついたろ？ そのときによオ、アホみたいに叫んで逃げてるいかにも駆け出しって感じのひよろくせえガキを見たんだよ！」

その声を合図に隣に座る兎の動きが固まった。

周りの客や他のロキファミアリアも興味を持ったのか店内に嫌な静けさが生まれた。

「ミノタウロスって17階層で襲いかかってきて返り討ちにしたら、すぐ集団で逃げ出していったやつのこと？」

この声はアマゾネスのペツタンコの方か。

「それそれ！ どんどん上層に上がっていきやがってよお。そんで5階層に行ってみたらそのガキがめちやくちや怯えながら逃げててよ！」

それを聞き隣を見ると手を強く握り俯く姿の兎がいた。

あの時のことか、と思ひ出す。

「それでアイズがミノタウロスを追いかけてったけどよ…あのガキの逃げてる時の顔と  
いったら…:…思い出しただけで笑えてくるぜ。ほんと自分でなんも出来ねえ雑魚なら  
ダンジョンに潜んなって話だ」

腹を抱えて笑う犬っころ。

周りの面々も笑ってるは笑ってるが、それは数人で苦笑いのような愛想笑いのような  
ものだった。

他のものは無表情。また始まったか、なんて言う雰囲気の流れていた。

「しつかしああいうヤツ見ると胸糞悪くなつちまうよなあ。ああいうのがいるから俺達  
の品位が下がるってもんだ。勘弁して欲しいぜ」

どの口が言う。そんな言葉が込上がるが我慢だ。ここで騒ぎを起こすのは良くない。  
身バレもそうだが店に迷惑もかけられまい。

そんな時、凜とした声が響いた。

「いい加減そのうるさい口を閉じろベート」

王サマエルフの声だ。

あいつは常識人だからな。たまらずと言ったように声を発していた。

「ミノタウロスを逃したのは我々の不手際だ。それを棚に上げてその冒険者を酒の肴に  
しようなどと恥を知れ」

「おーおー流石エルフ様。誇り高いこつて。でもよ、そんな救えねえヤツを擁護してなんになるつてだ？それはてめえの失敗をてめえで誤魔化すための、ただの自己満足だろ？」

「……いや、ダメだ。抑えよう。このままだと良くない。」

兎も我慢してる。俺が我慢しなくてどうする。そう思いながらも俺は深呼吸をし息を整える。

「これ、やめえ。ベートもりヴエリアも。酒が不味くなるわ」

この声はドワーフの髭モジャカ。全くもつてそうだ。さつきから落ち着くために飲んでる酒に味がしない。不味い。

「アイズはどう思うよ？自分の目の前で震え上がるだけの情けねえ野郎を」

「……あの状況じゃ、仕方なかったと思います」

「なんだよ、いい子ちゃんぶつちまつて。…じゃあ質問を変えるぜ？あのガキと俺、ツガイにするならどつちがいい？」

「ベート、君酔ってるね？」

ちびつこの声が聞こえた。その声音は少し怒りを含んでいた。

「……私は、そんなことを言うベートさんとだけは、ごめんです」

ざまあ。アイズの言葉に飲んでる酒に味が少し戻ってきた。

「無様だな」

「黙れババアツ。…じゃあ何か、お前はあのガキに好きだの愛してるだの目の前で抜かされたら、受け入れるってのか？」

「……っ」

「そんなはずねえよなあ。自分より弱くて軟弱な雑魚野郎に、他ならいお前がそれを認めねえ。雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシユタインには釣り合わねえ」

その言葉に隣の兎は立ち上がろうと――

「待て待て」

「っ！」

首の根っこを掴み力づくで座らせる。

「今日はお前の礼で俺はここに来た。そいつを置いてどこに行こうとしてやがんだ？」

「っ……」

「……なあ、兎。俺たちの関係ってなんだ？」

「え？」

そう聞くと兎は暗い顔で、それでも俺の質問に律儀に思索していた。

「恩人……とかですか？」

「そうか。でも今日は一緒に飯食った。仲良くもなった。違うか？」

「え?……はい、そうですね」

「ならもうダチだな?」

「え?」

うし、決めた。もう隠れることはしない。

やっちまおう。

「ちよつと待つとけよ鬼。こつからはこつちのターンだ」

そう言つて俺は酒瓶と座つていたイスを手に立ち上がった。

## 絶対に敵対してはいけない人類

背中に兎と生真面目エルフ、あともう一人、誰かの視線を感じながら俺は今なおゲラ笑いしているくそ犬の方へ向かっていた。

そんな中俺が近づいてくるのに気づいたロキファミアリアのくそ犬を覗いた面々。その中でも特に王サマエルフは目を見開いて驚いた顔をしていた。

そして、

「よオ、あんちゃん」

「あん?」

持っていたイスを一旦置き、その手でくそ犬の肩をポンポンと叩きながら声をかける。

その声に振り向くくそ犬。顔が赤い。相当に酔っている様子だった。

「おもしれー話してるみてーで?」

「ああ?……は!あんたも一緒に聞かか?」

鼻で笑うくそ犬。下卑た笑いでそう聞いてくる。が、

「聞かねえよタコ。胸糞悪いんだよクソが」



その言葉と共に顔面に酒瓶を横薙ぎにぶち当てた。

「っー！」

瓶の割れる音、そこから吹き出てくそ犬の体にかかる酒の音。そんな音が辺りに鳴り響いた。

「「「!?」」」

他のロキフアミアアの面々も驚いた顔をしている。

もうやつちまつた。後戻りはできない。ならもう、はつちやけよう。

「……………ぶっーテメエ…っー！」

顔にかかった酒を手で乱暴に拭いたくそ犬は憎々しい顔でこちらを睨みつけてくるが、その顔面に割れた瓶の断面をねじ込んだ。

「ぬおっ…!？」

かろうじて腕でガードしたようだがそのまま押し切り、店の壁まで吹っ飛ばす。

「グッ……………」

背中が壁にぶつかり苦悶の声をこぼすくそ犬。

そのまま休ませる訳なく、椅子を手に取りそのまま脳天に叩きつけた。

「ガッ……………」

衝撃で弾け飛んだ椅子の破片を足で蹴り押しそのまま開いた口にぶち込み、

「もがッ!？」

驚く様を他所に低い態勢から拳を顎へ。アッパーが直撃したくそ犬はそのまま天井まで打ち上がった。

「……………つ。ゴホツ……………て、テメエは……………」

激しく動いたせいだろう。いつの間にかフードがめくれていた。

俺の顔を見たくそ犬の顔が驚きの表情を浮かべ、それを見た俺は思わず口角が上がった。

「久しぶりだなクソ犬。昔みたいにゲロ吐かせまくってやるよ」

その言葉を吐き出してから数秒、くそ犬が吐き出す断続的な呼吸だけが店内に聞こえる程の静けさが生まれた。

「生きてやがったか……………喧嘩屋!」

「俺が死ぬわけねえだろ!バァーカ!」

吠える犬の顔面に向かって蹴りを放つ。がそれに合わせて腕でガードしたくそ犬はカウンターの要領で蹴りを返してきた。

しかし、

「なっ……………」

「……………昔に比べたらスピードはあるが重さが足りてねえな?」

それを横から手を差し込み足首をつかみ止め、そのまま体を捻りその反動で足を持つ手を振りかぶる。

投擲のような姿勢のまま腕を振り、くそ犬の顔面を地面に叩きつけた。

「カハッ……！」

「おら、ダメ押しだ」

バウンドした頭を足裏で踏みつけようとしたが、くそ犬は地面に着けた両手を軸に体を回転、攻撃を避けつつ蹴りを顎へと向けてきた。

「フンッ！」

しかし、それを避けず頭突きで相殺。

「なっ……！」

驚くくそ犬の伸びきった足をつかみ、そのままもう1回地面へと叩きつけた。

「グッ……フ……！」

手からすっぽ抜けたくそ犬の体は数度バウンドし店の壁に激突。

荒い呼吸で座り込むその目はこちらを睨んでいた。

「おうおう、強くなつたじゃんクソ犬。俺チビりそうだわ」

「嫌味言ってるじゃねえよ……！」

そんな会話を繰り返す俺たちの周りはザワザワとしていた。

「喧嘩屋？いま、喧嘩屋って言ったか？」

「言ってた。俺も聞いた」

「なあ、喧嘩屋って何？」

「え？でも死んだって…」

「バカ、あんな奴が簡単にくたばるわけねえ。どっかで隠れて生きてたんだ」

「喧嘩屋？聞いたことねえな」

「バカ、あいつと目を合わすな」

そんな小声での会話が微かに耳に入ってきた。

ロキファミリアの面々は何も言葉を発さない。各々が驚愕の目を向けてきている。

そんなに驚くことか？とは思うが、まあ5年も姿を見せてなかったんだ。気持ちはわからなくもない。

そんな時、

「あんた、ほんとに喧嘩屋かい？」

「あん？」

声をかけてきたのは豊穡の女主人の店主、「ミア・グランド」。

少し戸惑いの表情を浮かべながらも落ち着いた口調で言葉を続けた。

「ここは料理を食べる場所なんだ。頼むからものは壊さないでくれないかい？」

その言葉に俺やロキフアミリア以外の面々はそんな店主の態度に驚いていたようだった。

その言葉に目を閉じ数度頷く。

「……確かにな。ここは飯を食う場所、喧嘩の場所じゃない。昔の俺なら関係ないと言っていたとこだが……俺も大人になった。楽しく飯を食ってるやつ邪魔すんのは忍びねえ。……てなわけだクソ犬」

「あ？……っ!？」

座り込むくそ犬の土手っ腹。気を抜ききっていたところになすかさず足を滑り込ませた。

「続きは外だ。楽しく遊ぼうや」

その言葉と一緒にめり込ませた足を思いつきり振りかぶった。

直後弾け飛ぶくそ犬がもたれていた壁。その穴からくそ犬は外に弾き飛ばされた。

外から悲鳴が聞こえてきた。通行人に当たってなきやいいが。

こう考えるのも俺が優しくなった証拠だな。

「さてと……復帰戦だ。ド派手に行くか」

その言葉をつぶやくと同時に俺も外へ飛び出した。

直後目に入る立ち上がろうとしているくそ犬。

「寝ててもいいんだぜ？ 起き上がる度にボコす」

「誰が……！」

「喋ってる暇はねえぞ」

そう言いつつ顔面に飛び蹴りを見舞う。

建物に背を預けていたくそ犬はそのまま後頭部から建物を破壊し吹き飛んで行った。

「食ったもん全部吐かせる。吐くもん無くなっても吐かせてやるよクソ犬が」

◆◆◆

たった目の前で起こったことが信じられなかった。

白髪の少年はたまらずに先程まで談笑しながら同じ料理を食べていた男が飛び出て

いった穴から外に出ていた。

強い強いとは思っていた。

でも、

「……強、すぎる」

ロキファミアリア所属、ベート・ローガ。

ヴァナルガンド

凶狼の異名を持つ1級冒険者。

ギルドの専属アドバイザーからの話でしか知らない少年だが、それでもオラリオで見ても上から数えた方が早いレベルの強さを持っていると理解はしていた。

でもこの有様は、

「こいつは……ちよいと不味いな」

そんなことを思っているといつの間にか横に来ていた糸目の赤髪の女性。

「うん、どうにかして彼を止めないと…」

「最悪、死んでしまうぞ」

金髪の小柄な男と、小柄な髭が生えた男が女性の言葉に続いて口を開いた。

「ガッ…ハ」

「んなもんか！Lv5の冒険者ってのはアツ！」

今なおボコられる狼人。

Lv5と恩恵無し。しかし、立場は真反対の戦闘になつていた。

「てか、アイツだつてLv5よ!?!にしては一方的すぎない!?!」

アマゾネスの1人が声を上げた。胸の大きい方だ。

その問いに答えたのは緑髪のエルフ。

「トラウマか…」

「せやな。昔はカグラに死ぬほどゲロ吐かされまくってたもんな」

「ああ。ベート自身は気づいて無いだろうがそれがトラウマになって強く出れていない。動きが阻害されてる」

「それってやっぱり不味くない？」

もう一方のアマゾネスが心配の声を上げた。

それに頷く金髪の小柄な男。

「うん、不味い」

しかし、そう言うが誰一人として動こうとしない。いや、動けない。

はつきり言う喧嘩屋の喧嘩に割って入るのは飛来する核爆弾を生身で受止めに行  
くようなものだ。

さらにはえぼここにはご飯を食べに来ていたロキファミア。得物など持ってきて  
いる訳もなく……冷や汗を流すこと以外で来ていなかった。

そんな時、

「君、あの時の子……だよね？」

「え？」

少年にかかる1つの声。

その声の主は綺麗なロングの金髪をなびかせた儂げな少女。



アイズ・ヴァレンシユタインだ。

「確かカグラのツレやったな？自分？」

「は、はい」

「アイズ？あの時の子って？」

「うん、ミノタウロスに襲われていた子」

それを聞いたロキファミアリアの面々は総じて頭を抑えた。

「マジかいな。カグラの特大地雷踏んでもうたか……」

「本格的にどうにかしないと……」

「昔から知り合いバカにされると頭に血上ったもんね……」

「……もうあのバカの自業自得でいいんじゃない？」

その言葉に賛同しかける他面々。

その次の瞬間、彼らの目の間に飛来する2つの影。地面に墜落したそれは大きな地響きを響かせ土埃を巻き上げた。

「けほっ、けほっ」

「なんやなんや？」

「……」

各々が反応を示す中、その土煙は晴れていく。そしてそこに居たのは、

「よオ、分かるかクソ犬」

「グツ…ガフツ…」

狼人の背中に乗る喧嘩屋だった。

## ”強い”とは

「よオ、分かるかクソ犬」

「グツ…ガフツ…」

文字通りに尻に敷いたくそ犬にそんな問いを投げつつ一息つく。

「な、何がだよ…！」

「弱いやつと強いやつの違いだ」

そんなことを言いつつ懐からタバコを一本取り出し啜える。

喧嘩終わりに一本吸うのがいつもの癖だった。こうやって吸うのは懐かしいなんてことを思いつつ火をつける。

「…：…違いなんていちいち確かめることかよ…：…自分で何も出来ねえやつは雑魚、自分一人で敵をぶっ倒せるやつが強いやつだろ」

その言葉を聞き、肺に入った煙を吐き出す。

「これでもなあ？ テメエの言いたいことはわからんでもねえわけよ俺は。ただテメエは視野が狭いし見る目もねえ」

「あ？！」

「テメエがさつきバカにしてた駆け出しは俺のマブだ」

「……………」

驚くくそ犬を他所に俺は立ち上がった。

そのまま見下ろす形でそのくそ犬に言葉が続けた。

「駆け出しなんざ泣いて逃げるくらいがちようどいい。駆け出しの段階で弱いも強いもねえからな。そこで死んじまったら終わりだもんよ。無様に命に執着するくらいが普通だ」

「……………」

「弱い強いはその後、圧倒的恐怖を前にしたあとの気持ちの持ちちようで決まるもんだ。成長出来ねえやつが雑魚、足を踏み出せるやつが強くなる野郎だ」

「……………チツ」

舌打ちするくそ犬。俺はそいつの頭に足を乗せそのまま少し体重をかけるように足に力を込めた。

「つー…グツ」

「テメエはその駆け出しの可能性を笑ったんだ。分かるか？俺のマブをテメエは笑ったんだ。言いたいことは分かる。でもよお、それをバカにして酒の肴にする権利はテメエなんざにありはしねえんだよ」

「クツ……!」

「テメエの可能性すら信じられなくなったテメエが他人の可能性笑うなや。今日はここいらで終わらせといてやるが次は…潰すぞ?」

そう言つて俺は足を退けた。

さて、

「おい兔」

「は、はい!」

「この後どうする?」

「え?どうするって……」

「……強くなりてえか?」

そう聞くとキョトンとした間抜け面を見せる兔。

しかし、次の瞬間にはその目に光をともしながら、

「はい」

そんな短い言葉だが明確な思いが込められた言葉を吐き出した。

「オーケー。んじゃ今からダンジョンだ。ゲロ吐かせるまで稽古つけてやる。ついて来いや」

「え……あ、は、はい!」

歩き出した俺に小走りで着いてきた兎。

頑固だが素直。愚直に前にしか進めないアホ。この兎はそんなやつだ。でもそんなやつは強くなれる。

今日自分の弱さを知った。それを受け止めて行動しようとした。言い訳もしないで受け入れる、簡単そう簡単にはできないもの。

「おい兎……いや、バル・クラネルよ」

「え？」

「おめエ、強くなれるよ」

「……っ」

俺の言葉に言葉が詰まる兎。

……泣き虫は治してもらわんな。

「んじゃ、そーゆー訳だ。またなークソ野郎共」

最後に知り合いに挨拶。

返ってくる言葉はなかった。

「そう言えばカブラさん」

「あ？」

「……お代、まだ払ってなかったです」

「……俺も刀置いてきてたわ」

後で取りに行こう、そう思った。

「あと、兎。俺の本当の名前はカグラな」



「……行つたわね」

誰がこぼしたかそんな言葉。

豊穰の女主人、その店前に佇むロキファミリアの面々。

その後ろから喧嘩屋が去っていった方向見ていたのは店の店員たちだ。

「相も変わらず変わってないみたいで、安心すればいいのか呆れればいいのか」

「まあ、元氣そうでなによりってことで」

アマゾネス姉妹の会話。

同じファミリアに所属する狼人をボコられたというのにその声は怒りを含むどころ

か少し嬉しみをまとった声音だった。

「にしても相変わらざるの強さだのう」

「うん。武器を手にしていたとして今の暴れようを止められたかどうか」

「ワシら全員でかかればいけてたかもしれんな」

「……そうだね」

ドワーフの男の言葉に苦笑いをうかべる小人族バルウムの男。

「しっかしこれ、オラリオがまた荒れるで」

頭を押える糸目の女神。

頭に思い浮かべたのは自身と同じ立場の神々たち。この先の未来を思い浮かべてこの女神の口角は上がっていた。

「……」

「……アイズ」

金髪の少女に話しかける緑髪のエルフ。

2人の顔は微かな笑みを浮かべていた。

「リヴェリア……」



「どうした？」

「……カグラ、生きてたね」

「……ああ」

エルフは黄昏の館で待つ、オラリオ最強の魔道士にいい知らせができる、なんてことを考えていた。

「……やはり生きてましたか」

「そう言うウエイトレスのエルフは笑みを浮かべながら仕事へと戻って行った。」

## 喧嘩屋と炉の女神

遅い。

そう心の中で思うこと、果たして何十何回目か。

黒い髪をツインテールにまとめた中々に大きな果実を2つ持つ1人の女神が住処と  
している教会の前で右往左往と落ち着かない様子でそこにいた。

昨日の夜自身の眷属から「ご飯を食べに行くと言われて別れてから10時間は経つ。  
もう朝日も昇ってきている。いくらなんでも遅すぎる。

何かトラブルに巻き込まれたか、それとも酒場で知り合った女とよろしく……なん  
て、色々な考えが頭をよぎる。

「ああもうほんとにベルくんはどこに行っただんだい！」

たまたまず叫び出す声が辺りに響いた。

初めての眷属ということで思い入れもあるのだろうが、恋慕の気持ちも少なからずあ  
る彼女。心配に心配を重ね、

「はむはむ……」

じゃが丸くんを頬張った。

もうかれこれ外に出て数時間は経つ。朝の時間に差し掛かってそろそろ朝ごはん時、そりゃ腹も減るだろう。

「そうやってちよつとした段差に座り込みじゃが丸くんを胃の中へ全部落とした時、  
「神様」

「つーベル君！……え？」

血にまみれた自分の眷属とそれをおんぶしている目つきの悪い男が目の前に現れた。



「いやあ、送ってきてもらっちゃってごめんね」

目の前に座るツインテポイン。

本拠ホームの中に招かれ、事の経緯を話していると人懐っこそうな笑顔でそう言った。

「気にする必要はねーよ。俺も久々に骨のあるやつに会えて万々歳だ」

「うんうん。でも、ベル君はベル君であまり無理しないようにね」

「あはは……はい……」

遠い目をしながらソファに横になる兎。

……ちよいと初っ端からやりすぎたか。

「にしても兎」

「え？あ、はい」

「お前の神ってのはこいつなんだよな？」

「そうですけど……」

なるほど。こいつが…。

そう言っただけで目の前にいるツインテボインの女神を一瞥した。

確かに纏う雰囲気は他とは違う。

「名前はなんだったわけ？」

「え？あ、ボクかい？ボクはヘステイア！よろしくね！」

「そうか。よし、んじゃツインテボイン」

「あれ!?ボク今ヘステイアって名乗ったよね!？」

抗議するロリ神を無視し俺は言葉が続けた。

「俺このファミリア入りてえんだけど」

「それじゃあ背中出してね」

俺の発言から驚いていた兎とツインテポインだったが、その後2人で固く手を握りあいそのまま小躍りを数十分にも渡って踊っていたが、俺がいつまで見てりやいと云うとすぐに辞めた。

「背中か。何すんのよ?」

「ボクの血を背中に垂らすんだよ。それで神の恩恵を刻むんだ」

そんな簡単なのか。初知りだ。

「そんなじゃ俺は寝転がった方がいいんか?」

「そうだね」

そう言われ上の服を脱ぎうつ伏せでベットへ寝転がる。

そうしていると腰に重さを感じた。ツインテポインが乗ったようだ。

「これで一緒のファミリアですね!」

ソファに腰掛けている兎。起き上がるのもだるくて寝転がっていたあれから大分体調は良くなったらしい。

「そーだね」

「でもこれは冒険者としては僕が先輩ですよね?」

「あ?」

「だから後輩のカグ「もっぺんダンジョン行くか?」……なんでもないです」

全く……新しい仲間ってことで嬉しいのはわからなくもないが冗談の内容という相手は選べって話だ。

それにしても、

「おいまだ終わらんか？」

「……………え？あ、ちよ、ちよつと待っててね。い、今終わるから…」

何を慌ててるんだ。

……いや、まあそうか。驚きもするか。しゃーない、気ままに待とう。

そんなこんなで数分かかり神の恩恵を刻み終えた。

起き上がった俺は服を着た。

「はいこれ。君のステイタスだよ」

そう言って渡される1枚の羊皮紙。

そこに書かれていたのは、

カグラ

L v.

力 : I O

耐久：10

器用：10

敏捷：10

魔力：10

《スキル》

【武芸百般】

- ・ 武器を装備してる時、自身のステータスに高補正
- ・ 手にしている武器に貫通効果を付与する
- ・ この貫通効果はあらゆるものを破壊可能とする

「これがカグラさんのステータス……もうスキルあるんですね」

俺の持つ紙を後ろから覗き込む兎。プライバシーもへったくれもないな。

「うん。ボクも驚いたよ。いや、ホントに……」

その言い方はなにか含みのある言い方。俺はツインテポインの目を見ていた。その目は縦横無尽にさまよっていて落ち着きがなかった

「強いスキルですね……」

「……まあ、昔から喧嘩しまくってたし何かしら持ってなきややつてらんねえよ」

「うう、いいなあ……」

「おめエもいつか持つ時来んだろ」

そうは言うが肩をしょんぼり落としている兎。

その後、兎のステイタスも更新し今日は探索休み、俺がギルドに冒険者登録しに行く流れになった。

ちなみに兎も何かスキルが出てたようで叫び声を上げて嬉しがってた。うるさい。



「で？ ツインテポイン。話しがあんだが？」

ベルが外へ買い物へと出かけ、教会に喧嘩屋と2人きりになったヘステイアファミリア、主神。

彼女の頭からは一筋の汗が流れていた。

「な、何かな？」

「俺の”本当のステイタス”見せろ」

「うう……」

そう言う喧嘩屋の眼光に思わず怯む。

そう先程見せたステイタスの書かれた羊皮紙。あれは意図的にこの女神が消した項



目がある。

なぜならそれはベルに見せるにはあまりにもな内容だったからだ。

「……………はい、これです」

目を逸らし続けていた女神は根負けし…………いや、喧嘩屋の眼光に耐えきれずに一枚の羊皮紙を差し出した。

そこに書かれていた内容は、

カグラ

Lv.??

力 : 10

耐久 : 10

器用 : 10

敏捷 : 10

魔力 : 10

《魔法》

【神懸かりした肉体】

1 ▼

・常時魔法

・ステイタスに超高補正

・この魔法に魔力の消費はない

☒詠唱☒

《——》

2 ▼

・自身の体と自身の体に触れている物に武装効果を付与

・この武装効果はあらゆるものの硬度を高める

・込める魔力が多いほど硬度は増す

☒詠唱☒

《——詠唱破棄——》

《スキル》

【喧嘩屋】

・このスキル発現者にレベルの概念は無い

・ステイタスの数値の上限が突破

・敵とみなした相手が強いほど、比例して自身のステイタスに補正

- ・自身が負ったダメージ量に比例して自身のステータスに補正

### 【戦闘続行】

- ・たとえ致命傷を受けても倒れない
- ・デバフを負う事にステータスに高補正

### 【素手喧嘩】

- ・武器、防具を装備してない時、自身のステータスに超々高補正
- ・どんな魔法、スキルでもこのスキル発現者の攻撃を止めることは出来ない

### 【武芸百般】

- ・武器を装備してる時、自身のステータスに高補正
- ・手にしている武器に貫通効果を付与する
- ・この貫通効果はあらゆるものを破壊可能とする

### 《発展アビリティ》

#### 【破壊の申し子】

#### 「なるほど」

一言つぶやく喧嘩屋。この内容は予想通り、と言うかこれが当然と言わんばかりの声

音だった。

「……君はあの噂の喧嘩屋くんだったのかい？」

女神がそう問いを投げた。

「まあな」

「そっか……」

「……特大地雷を拾い上げたよ、アンタ」

「み、たいだね」

そう言つて力無く笑う。

これがバレたら他の神達から何されるか。それを考えるだけでため息が出るようだった。

「ところでそのステイタスは何なんだい？普通、冒険者になりたての子はそんなにスキルや魔法持てるはずがないんだよ。喧嘩屋つて言えばどこのファミリアにも所属しなかったって聞くし……おかしいよね？」

眉をひそめ真剣な雰囲気で聞く女神、それに対して喧嘩屋は笑みをひとつ零し、

「俺は普通じゃねえからな。これに関してはまだおいおい教えてやるよ」

「……今は話す気は無いんだね？」

「当たり前。兎は気に入ってるがほぼ初対面の他人に秘密を教えるほど俺はあまちゃん

じゃねーよ」

「……そっか。分かった」

そこからは話をしても無駄だと悟ったのか女神は大人しく引き下がった。

それからベルが帰るまでの数十分間。喧嘩屋と女神はベルの話で盛り上がっていた。

## 冒険者登録

「あ、あの……き、今日から貴方の専属アドバイザーになります。み、”ミイシャ・フロツト”です。よ、よろしく、お願い、します」

「……専属アドバイザー？俺にいるかそれ？」

ただいま兔に連れられギルドにて冒険者登録中。

駆け出しに専属で付くギルドの職員、俺のアドバイザーになるらしい桃髪の女が涙目になりながらそう言った。

「ぼ、冒険者始めたての方に付くのは、き、決まりですから。わ、分かりますよ！貴方があの喧嘩屋だつてこととか、私なんかが必要ないことくらい！で、でもこれも職務なので……」

そう言われ俯く桃髪。

うーん、まあ確かに仕事なら仕方ないのか？

「まあ、詰まるところは形だけでもつてことか」

「そ、そうなりますね」

そんな話をしている中、少し離れた場所の応接スペースに座っている兔と兔の専属ア

ドバイザーのメガネが何やら会話をしていた。

「ほ、本物なの？」

「うーん、僕もこのオラリオに来て数日なので本物かどうかは分かりませんが……あ、でもロキファミアリア？の狼人の人を一方的に倒してはいましたね」

「……本物だわ」

ケロツと答える兎と頭を抱えるメガネ。

目の前の桃髪もガタガタ身体を震わせてるし、他の職員達も陰に隠れながら遠巻きでチラチラ見てる。

ギルド内の冒険者まで俺を避けてる始末。俺は別に危険物じゃないんだがな。

「そ、それでどこのファミアリアに所属……つてあの子に連れられてきてたみたいなのでヘスティアファミアリアで……いい、いいんでしょうか？」

恐る恐る聞いてくる桃髪。

「……俺の目つき、そんな悪いか？」

「え？……いやいやいや！とんでもない！大丈夫です！ほんとに！はい！なので怒らな  
いで……！」

そんな見境なく怒るか。

たく……ほんとに昔からこうだ。

周りのヤツらビビりすぎなんだよなほんと。

「とりあえず、ヘステイアんとこの眷属？になりました。カグラです。……これでいいか？」

「は、はいいいい、わ、分かりました」

そう言って走り書きした書類を持って奥へと消えていく桃髪。

走り去っていくその目から何かキラキラしたものが見えたのは言わないでおこう。

……慣れない敬語まで使ったのにビビんなよ。



桃髪のギルド職員、ミイシヤが作業のために……あと喧嘩屋から逃げるために奥の方へ去っていったのを確認した喧嘩屋は長くなりそうだとロビーのソファに座り込み昼寝を始めていた。

それを遠目から見ていたベル、そして彼の専属アドバイザーである”エイナ・チュール”こと喧嘩屋命名メガネはヒソヒソと小声で何かを話していた。

「そういえばエイナさん。カグラさんの事なんですけど……」

「……ベル君はここにきて日も浅いものね。あの怪物のことなんて全然知らないか」

そう言うエイナの言葉に首を縦に振るベル。

「そもそも喧嘩屋ってなんです？」



ずっと持っていた疑問。

酒場の件から耳にしていたその言葉をエイナに聞くベル。

「……一言で言えばあの怪物の異名ね」

「神様たちが冒険者に与える2つ名みたいなものですか？」

「と言うよりも自然とそう呼ばれていたのよ。神様たちからと言うよりオラリオ中からね」

その答えを聞きなるほど頷くベル。

エイナはエイナで頭を抑えていた。

呑気なベルを見て事の重大さを理解していないことに頭を悩ませていたのだ。

「じゃあ、カグラさんがあそこまで恐れられてる理由って……」

目を喧嘩屋に向け、さらにその周りの冒険者を見るベルはそんな疑問を口にした。

その言葉通り周りの人達は喧嘩屋から距離を取り関わらないように気をつけているようだった。

それ以外にも周りの冒険者たちが話してる会話。

「あれが喧嘩屋……」

「見すぎだ。関わるな関わるな」

「ロキファミアんとこの凶狼ボコつたらしいぞ」

「てか生きてたんだな」

「やべえ、やべえよ……。死んだと思つてたからあいつの名前使つて……。証拠隠しに行かねえと！」

そんな慌てたような様子を見せる冒険者たち。

喧嘩屋の横を不本意ながら通らなきや行けない冒険者たちは総じて喧嘩屋を起こさないように細心の注意を払い歩いていたり、ぎこちない動きになる冒険者だつていた。

「今はそれでもなさそうなんだけどね……。昔は凄かつたのよ」

「凄かつた？」

「うん。喧嘩屋つてどこのファミリアにも所属してなかつたのよ。つまり神ファールナの恩恵を持つてなかつたの。そんな中で1つのファミリアを潰しちやつてね。そこからは懸賞金かけられたりして色んな冒険者、ファミリアから狙われてただけどことごとくを返り討ちにして……。そこからはもう冒険者達からは恐怖の対象つて映つちやつたのよ」

その言葉を聞きベルは驚愕の表情を浮かべた。

そりやそうだ。神ファールナの恩恵無しで冒険者と渡り合うなんて、はつきりいつて与太話にも程がある。

「そういう反応が普通よね。でも、それが事実。それだけならまだ良かったんだけど、喧嘩屋の強さつて、今はもう居ないんだけどね？ゼウスファミリアとかヘラファミリアの

団長と肩を並べるくらいのものであったのよ。ちなみにその2つのファミリアの団長つて今のオラリオ最強の”おっじゃ猛者”より強かったのよ」

「……え？じゃあカグラさんつてオラリオ最強……？」

「分からないけどね？でも、最強の一角には確実に入るわね」

その言葉を聞いたべるは思わず座るソファの背もたれに体重を預けた。

頭の整理が追いつかない。

そこまでの人だったとは、そんなことを考えてはいるがそれ以上になんでそんな人が自身に気をかけてくれるのか、それが不思議でならなかった。

「あと喧嘩屋がやった事といえば、オラリオの街を半壊、17のファミリアを単独で再起不能、単独でダンジョン深層に行つて踏破記録を塗り替えたり、他には拳1つで地震を起こしたりとか？他にもいろいろ。まあ、後は……神殺しかな？」

「か、神様を殺したんですか？」

思わずベルは自身とエイナを挟むテーブルに手を置き身を乗り出して詰め寄った。

「事実確認は出来てないけどね。でも状況から確実に……って感じね。ただ邪神……闇派閥の主神だったこともあつてそこまでの罪にはならなかったみたい。まあ、大罪だったとしても喧嘩屋なんて捕まえられるはずもないんだけど……」

そう言つて力なく笑うエイナ。

それを聞いたベルは力なくソファに座り直した。

「……現実味が」

「無いわよね。目の当たりにしてきた私でも未だに信じられてないんだもの」

そんな風にひとしきり話した2人の間には無言が広がった。

エイナは過去の喧嘩屋を思い浮かべ、ベルは今聞いた話を必死に頭の中で整理していた。

そんな時だった。

「おい！てめえが喧嘩屋か！」

「……」

1人の中年のガタイのいい男が昼寝をする喧嘩屋に怒鳴り声をあげていた。顔が少し赤い。この時間から酔っているのだろうか？

知り合いなのか。周りの冒険者たちは彼を必死に止めようとするがその男は止まらうとしない。

「待て待て待て！お前落ち着けて！な!!」

「うるせえ！お前はあっちいつてろ！ここで喧嘩屋をぶつ倒せば俺はオラリオ最強になれんだろ!!」

どうやら最近オラリオに来たらしいその男。

仲間からの情報でオラリオで最強の1人とされる喧嘩屋と呼ばれる男がギルドにいると言う話を聞いてやってきたみたいだった。

「そうだけどさ！ 違うって！ 誰も倒せねえから最強なんだって！ マジでお前やめろって！」

「だから俺が倒すんだよ！ 俺のパワーに勝てるやつなんていねーんだ！ こいつの次はオツタルって野郎だ！」

そう叫んだ男は止めようとした仲間を押し飛ばした。

それを見てエイナは立ち上がる。

「まずい、止めない」と

「そ、そうですよね。このままだとカグラさんが…」

「違うわよ。命が危ないのはあの男の方よ」

そんな会話を他所に男は喧嘩屋の寝る椅子を思いつき蹴飛ばした。

「おい起きろ！ 喧嘩屋！ アホ面ぶら下げて寝てんじゃねえよ！ 調子に乗ったクソガキがよォー！」

「……」

そんな声を聞き喧嘩屋は目を開けた。

周りを見回して、そして、自身に突っかかってくる男に目を向けた。

「……お前でいいんだな？」

「あ？何ボソボソ言ってるやがる？まあいい、死んでけや！」

そう言つて背中に携えた大剣を手に取り喧嘩屋へと向けた。

「まずい！起きちゃった！」

「え？」

「聞いた話なんだけど喧嘩屋って……」

ベルがそんな言葉の続きを聞く前に剣を振り下ろす男。

「死ねえッ！」

無慈悲にも喧嘩屋に向かっていく剣先。

しかし、そんな中でもエイナの言葉はよく聞こえてきた。

「……寝てるってこ邪魔されるのが一番嫌いらしいのよ」

そんな言葉の直後に聞こえてくる何かが砕ける音。

「……え？……は？」

男の目は手にしている剣に向けられていた。その剣は半ばからへし折れもはや剣と呼べるものではない。

ただ分かることは目の前の喧嘩屋が無造作に向かってくる剣にただ単に腕を振つたということだけ。

「さつきからうるせえよ、お前」

「え」

喧嘩屋が呟いた直後、後頭部から地面にめり込まれる男。

顔面を掴む喧嘩屋が深深と男を地面へと叩きつけていた。

「たく……」

そんな言葉を吐き体を痙攣させながら白目をむく男を他所にソファに座りまた眠りへと着いた。

「……良かったあ」

「え？」

「いや、昔だったら問答無用で確実に死ぬまで殴り続けてただろうから。……昔よりマシになってるって聞いてたけど、良かったあ」

地面にへたり込むエイナ。

ベルはとんでもない人が仲間に、そして、とんでもない人を目標にしていることを改めて実感した。

## 喧嘩屋の日常2

「それではまた来ますね」

「うん、ベル君もあまり無理しないように」

「あ、あはは。分かりました」

冒険者登録も終わりギルドから出る時にそんな会話をする兔。

それに対して俺のアドバイザーときたら、

「……………」

俺が目を向けるだけで体をビクツとさせるだけ。

「……………また来るぞ」

「は、はい。お、お待ちしておりますです…はい……………」

変な語尾。来て欲しくないのが見え見えだ。

「はあ……………おい兔。行くぞ」

「あ、はい！それじゃエイナさん、また！」

「あ、うん」

先歩く俺に小走りで追いついてきた兔。



さて、の後は、

「刀取りに行くか」

そういえば忘れてきてたんだった。

兎も兎で代金払ってないみたいだしちようどいいか。

「すみませんでしたア！」

勢いよく頭を下げる兎。

その兎の目の前には昔とは打って変わってBBAになった豊穰の女主人店主の”ミア・グランド”がいた。

「こちら代金です」

「ふむ……まあよしとしようか。こうやってちゃんと金を持ってきて謝られちゃ責める気にもならないしね」

俺をチラッとみたBBAはそんなことを言った。

「ここで無理に詰め寄って俺の機嫌を損ねるのは良くない、なんて考えもあつただろうがこいつは元々しっかり筋通していたらそこまで詰め寄ることなんてしないやつだからな。」

そんなことはさておきだ。

「おい、さつさと刀返せよ」

「忘れていった貴方の責任でしよう？頼み方つてのがあるんじゃないんでしょうか？」

「この長耳が……削ぎ落とすぞ？」

生真面目エルフが一向に刀を返してくれん。

「この野郎が……昔から俺に食ってかかってきやつが。」

「できるものならどうぞ」

「ああ？」

「まあまあ落ち着いてください。リユームもよ？」

そんな俺たちの間に入ってきた銀髪のねーちゃん。確か、「シル・フローヴァ」といった名前だった気がする。

「久しぶりに愛しのカグラさんに会えて嬉しいのは分かるけどあんまりイチャイチャしないこと」

「な!?!何を言っているんですかシル！イチャイチャなんて私は……」

「今日のリユーは生き生きしてるニャ」

「表情が柔らかいニャ」

「そ、そんなわけ……!」

銀髪のねーちゃんの言葉で赤面する生真面目エルフ。それに追撃とばかりに茶髪と黒髪の猫キヤットヒールの2人にからかわれていた。

ふむ、確かにこう見ると昔に比べて表情も柔らかいような……いや、気のせいか。

「あ、はい。こちらカグラさんの刀です」

「あん? おお、サンキューな。どこかのアホエルフとは違って優しいじゃねーの」

「相変わらず貴方は一言余計です」

銀髪のねーちゃんが刀を持ってきてくれていたみたいだ。

うんうんこの生真面目エルフもここまで素直だったら可愛げがあるんだがな。

そんなことを思いつつ刀をもらおうと、

「……」

「……? どうかしましたか?」

「……いや、なんでもねえ」

思わず銀髪のねーちゃんの目を見つめてしまった。

なんだろうか。何か違和感を感じたのは気のせいか。とりあえず、それを考えるのは

後にしよう。

刀を受け取り腰に差す。今や腰に差してないと落ち着かないからな。

「それにしても、武器使うようになったのですね」

「使うって点じゃ昔から使ってたけどな。ただ、今は刀にハマってるってだけだ」  
「そうですか」

そう言つて生真面目エルフは腰に差した刀に目を向けた。

昔に比べて距離感が近いような。まあいいか。

「ところで他のアホ共は元氣してんのかよ」

「ええ、それはもう。昨日もあなたのこと話したら会いたいと言っていましたよ」

「あつそ。いつか遊びに行くって伝えとけ」

「分かりました」

そういうと生真面目エルフは踵を返し厨房へと戻つて行つた。仕事か。

そんなことを思っていたら、生真面目エルフは足を止め、

「カグラ」

「あ？」

「……また会えて嬉しいです。……では」

顔はこつちに向けては来なかったがそう言う生真面目エルフの特徴的な耳は赤かつ

た。

そして、足早に奥へと消えていく。ちよつと可愛いと思つたのは絶対に本人に言わない。

「よし、要件も済んだし帰るぞ兔」

「え、あ、はい！」

「BBAも、また食いに来るわ」

「……もう来ないで欲しいんだけどね。まあいいさ。来たなら来たで金使うんだよ」

「そんじやそれ相応のうめえ飯食わせろよー」

そんなことを言いつつ俺は兔と一緒に外へ出た。

さて、今日は何をしようかな。

## 神の宴

「じゃあ僕は今日帰らないからね」

「あ、はい分かりました」

「事故るんじゃねえぞー」

「君は僕の親か……」

朝方の時間。

ツインテポインが何やら友神ゆうじんが開くらしいパーティーに出席するために数日本抛ホームを開けるらしい。

「それじゃあ、行ってくるね」

「あいあいさー」

「行つてらっしゃい神様」

そう言つて見送る俺たち。

そんなこんなで一日が始まった。

「カグラさん！どうですか!？」

「距離のとり方に捻りが無い。そんな素直な間合いの取り方だとすぐに囲まれてフクロだぞ」

「うう……」

ダンジョン内にて兎の特訓。

基本的にはモンスターと兎を戦わせてそれを傍から見ると俺が評価するという形で行っている。

酒場の一件後の特訓で行っていると兎が潰れそうだったからな。少し優しめにした。その特訓の内容は兎の名誉のために言わないでおこう。ただ、血と汗と涙とゲロを巻き散らかしていたとだけは教えておく。

「はい、じゃあ次な」

「え？……ほあああああああー」

俺の言葉に示し合わされたかのようにゴブリンの群れが兎を襲いだした。

さて、がんばれがんばれ。



「よく集まってくれた皆の者！俺が『神の宴』主催者、ガネーシャである！毎度、多数の出席者にガネーシャ超感激！さて、今年の怪物祭モンスターフィリアまであと——」

象の被り物を被ったガタイのいい一人の男神、ガネーシャがそんな挨拶をする中、  
「美味い！ベル君達へのお土産としてお持ち帰りしよう！」

会場にてバカ食いするロリ神が一人。ヘステイアだ。

そんなヘステイアの周りではほかの神々が何やらヒソヒソと話している。

「ロリ巨乳来てんじゃん」

「生きてたんだな」

「てか、露天でバイトしてたぞ」

「客に頭撫でられてたの俺見た」

「さすがロリ神www」

小声で話してるというより、ギリギリヘステイアに聞こえる声で話す周り。

それを聴きながらもヘステイアはそこまで気にしないように意識しつつ口から息を吐いた。

そんな時、

「何やってるのよあんた……」



「むぐぐ?!」

ヘステイアに話しかけた一人の女神。右目に黒い眼帯、赤い髪を後ろでひとつにまとめた美しい女神だ。

「久しぶりヘステイア。ていうか食べすぎよ」

「ヘファイストス!」

そう言つて小走りで、ヘファイストスと呼んだ女神へと近寄るヘステイア。

「やっぱり来てたんだね!来て正解だったよ!」

「何よ。言つとくけどもうお金は貸さないからね」

「失敬な!僕が神友にそんなことをするやつだと思つてるのかい!」

「え?貴方、オラリオ（オラリオ）に来たばかりの頃は私に頼りっぱなしだったじゃない」

どうやら昔なじみの親しい関係にあるようだ。

ヘファイストスも久しぶりに見る友人に顔を綻ばせていた。

「ふふ、相変わらず仲がいいのね」

そんな声とともに現れた一人の女神。

ヘステイアとヘファイストスを囲む神達が一斉に避けその女神に道を譲つた。

そこに立っていたのは、

「美の神、フレイヤ……!」

誰が放ったかそんな言葉。

そう、そこに立っていたのはオラリオ最大規模のファミリアを持つフレイヤファミリアの主神フレイヤだった。

その姿を見たヘステイアは思わず後ずさりしてしまう。

「あら、お邪魔だったかしら？ヘステイア」

「う……僕、君のこと苦手なんだよね」

「あら……私はあなたのそういうところ、好きよ？」

そう言い微笑むフレイヤ。

その時、

「おい！フアーイターン！フレイヤー！どチビー！」

そんな大声で接近してくる女神がまた一人。

酒場にいた糸目の女神。ロキファミリア主神、ロキだ。

「ロキ、何しに来たんだよ君は……」

「なんや、理由がなきや来ちやダメなんか？そっちの方が無粋つちゆうもんやろ。ほんま空気読めてへんわーこのどチビ」

そんな言葉を聞き凄……形容しがたい顔になるヘステイア。

ヘファイストスからも、あなたすごい顔よなんてことを言われていた。

「久しぶりねロキ。あなたのファミリアの名声、よく聞くわよ？よくやってるみたいじゃない」

「大成功してるファイタんにそう言われるとわなあー。でもまあ、今の子達はうちの自慢なんや」

へファイストスの言葉に少しばかり照れを見せるロキ。

指先で頬かきながらそんなことを言った。

「そう言えばなんやけど…」

「…？どうかしたの？」

ロキの歯切れの悪い切り出し方を訝しむへファイストス。

「喧嘩屋の話、聞いたか？」

その言葉で3人の女神、そして4人の女神をチラチラと見ていた周りの神達が一斉に反応を示した。

「……噂程度には耳にしていたわ。生きていた、って言うことはね」

「……」

へファイストスが言葉を返し、フレイヤは微笑を浮かべ何も言葉を発さない。

そしてヘステイアと言うと、

「……っ」

大量の冷や汗をかいていた。

「ちなみに言うてまうとな？うち、もう本人に会うてんねん」

「「っ！」」

驚く3人。そんな3人を他所にロキは言葉が続けた。

「うちのベートがひよんなことからボゴボゴにされてまうてな。あれは間違いなく本物やで」

「凶狼が……」

「……それは確かに本物とみていいわね」

そんな会話を繰り返す中へステイアは1人汗を流しながら視線をさ迷わせていた。

まずい、このままだと……そんなことを思っていた時だった。

「すごいや昨日ギルドに喧嘩屋がいたみたいな話聞いたな」

「は？まじ？」

「おう、なんか男の冒険者たちよつとした騒ぎがあつたらしいぞ」

周りの神々達もそんな話をし始めていた。

何をしてるんだい！カグラくん！そんな思いを心の中に募らせながらもどうかこれ以上話が大きくならないように祈ろうと――

「そーいや聞いた話なんだけどあの喧嘩屋がどつかのファミリアに所属したみたいだ

ぞ」

「「「え？」」」」

「っ!？」

そんな言葉に反応する周り。ヘスティアはさらにぶわっと汗が吹きでる錯覚を感じた。

「あ、それ俺も知ってる。確か……おい、ヘスティア」

「ひゃい！な、なんですか？」

「聞いた話だとお前のファミリアに入ったって……」

「「「え？」」」」

その言葉にさらに固まるヘスティア。

これはまずい。この流れは本当にまずい。

「いやいやまさか。だってヘスティアだぜ？」

「確かにな。ないない」

「あ、あははー……」

周りの神たちからの言われようには言い返したくなるがこの流れに乗つかれ。そう思い、ヘスティアは苦笑いを浮かべるが、

「てか、どちびんとこの白髪の駆け出し、カグラの連れやなかったか？」

ピシッ!

ロキのそんな言葉にヘステイアの体が固まった。

「「「え?」」」

又もや困惑の声を出す周り。この流れは何度目か。

「え?じゃああの噂って…」

「マジでロリ神のところに…?」

「ど、どんな手を使ったんだよ」

「ヘステイア、あなた…」

固まるヘステイアを他所にざわめきたつ周りにヘステイアに目を向けるヘファイストス。

これは助からないな、そう思ったヘステイア。次の瞬間。

「ヘステイアア!」

「説明しろ!」

「お前お前お前エ!」

「わわわ…」

寄つてたかられるヘステイア。それから小一時間その囲いから抜け出すことは出来なかった。

「つ、疲れた…」

「お疲れさま」

やっと解放されたヘステイア。その顔は今にも死にそうなものだった。

「フレイヤとロキは？」

「もう帰ったわよ。ロキはあんたに嫌がらせできたってことで満足してたし、フレイヤも確かめたいことは分かったからって」

「……ふーん」

ヘファイストスの言葉に素っ気なく返した。

「で？あんたはどうするの？このまま残るなら久しぶりに飲みに行く？」

その質問に気まずそうな顔をするヘステイア。

しばらくしてその重たい口を開けた。

「う、うん。えーと、ヘファイストスに少し…頼みたいことが…あるんだけど……」

その声は段々と小さくなっていき最後の方はほぼ聞こえないレベルの小声。

それを聞いたヘファイストス、彼女の目がヘステイアを睨みつけていた。

「この期に及んで頼み事ですって……？」

そう言う彼女の目は鬼を彷彿とさせるような雰囲気を醸し出していた。

ヘステイアは心の中で、ベル君、カグラ君、僕に力を貸してくれ……なんてことを切に願った。



## 鍛冶で送る感謝

「はあ……」

とある執務室にそんなため息がこぼれた。

その発生源は椅子に座る1人の女神、ヘファイストス。

彼女は目の前にうずくまる形で地に伏しているとある女神を見ていた。

「あのねえ、いつまでそうやってるつもりなの？ 私も忙しいのよ」

「……………」

ヘファイストスがそう言うがそれでもなおも押し黙る女神。

「…………あのねえ、ヘステイア」

うずくまる女神、いや、土下座するヘステイア。そんな彼女に語りかけるヘファイ

トスは呆れたような声音で口を開いた。

「何度も言うけど、ヘファイストスファミアちの上級鍛冶師スミスの武具は最高品質。性能も

値段も一流なの。…………自慢じゃないけど。子供たちが血と汗を流して作り上げる武具

…………それを友神のよしみで格安で提供、なんて出来るわけないでしょう？」

そうは言うが姿勢は崩さないヘステイア。

ガネーシヤの宴から一日、そんな時間が経っているその間、ヘステイアはこの姿勢を崩すことは無い。

「そもそもその格好はなんなのよ…」

「土下座」

「え？」

「タケミカツチ<sup>タケ</sup>から、これをすればなんでも許されて何を頼んでも領いてくれる最終奥義……つて聞いた」

それを聞いて思わずここにはいない男神に悪態を吐くヘファイストス。

そんな思いを押し込めつつため息をひとつ。

「教えてちょうだいヘステイア。何があなたをそうさせるの？」

「あの子の力になりたいんだ…！今あの子は変わろうとしている。険しい道を進もうとしている。だから欲しい！そんな道を切り開くための武器が！ボクはあの子に助けられればかりで神らしいことは一つも出来ていない…！何もしてやれないのは、嫌なんだよ…！」

その言葉を聞き、数瞬考えるヘファイストス。

そして、数度頷き、

「……分かったわ。作ってあげる、あなたの子にね」

それを聞いたヘステイアは思わずといったように顔を上げた。

「あなた、私が領かない限り梃子でも動かないでしょう？」

「うん！ありがとうヘファイストス！」

「ちゃんと対価は払うのよ？何百年後かかっても」

「分かっているさ！ボクだってやる時はやるんだ！」

「はいはい」

そんな形で話がまとまり、ヘファイストスが腰を上げ早速と言ったようにベルのための武器を打とうとしたその時だった。

「ん？」

何やらドタドタと音が聞こえてくる。

それは扉から。誰かが廊下を走っているのだろうか。

そう思った時、

「主神様！」

そんな言葉と共に中に入ってくる1つの影。

褐色肌に黒い髪を一つにまとめた長身のヘファイストスファミリアに所属する女性。

その大きな女性特有の2つの果実をサラシで抑えただけのそんな彼女はズンズンと中へと入ってきた。

「つ、椿？どうかしたの？」

椿と呼ばれたその女性。

”椿・コルブランド”。ヘファイストスファミリアの団長を務める最上級鍛冶師マスター・スミスの称号を冠する人物だ。

「こちらにヘステイア様がいると聞いて……っ！」

部屋を見渡す椿。

そして、その視界にヘステイアを収めるとおもむろに彼女はヘステイアの前へ向かい両手を地面につき目を見た。

「ヘステイア様！」

「え？は、はい！」

「そちらのファミリアにあの喧嘩屋が所属しているというのはホントでしょうか!？」

椿の言葉に正直に言うか迷ったヘステイアだったが今更隠すことでもないだろうという判断で正直にそう言った。

すると、椿は頭を下げ、

「でしたら、手前にその喧嘩屋の武器、打たせて貰えないでしょうか!？」

「え？」

「……はあ、椿、あなたあの時の約束のこと？」

「それもあるが、手前がどうしても打ちたいだけです！」

そんな言葉を聞き呆れるヘファイストス。

ヘステイアはと言うと困惑の顔を浮かべるだけだった。

「もちろん代金は必要ないです！」

「え？」

「は？ちよつと、椿！それは……」

「お願い、します」

そう言つて頭を下げ続ける椿を見ていたヘファイストス。

少しの間躊躇いを見せていたがまたもやため息をつき、

「……ヘステイアがいいと言うならいいわよ」

「え？ぼ、ボクかい？えーと……」

頬を指先でかきながら悩むヘステイア。

しかし、次の瞬間には力強く頷いた。

「うん！それならカグラ君の武器お願ひするよ！」

「つ！ありがとうございます！では、手前は早速作業に入らせてもらいます！」

そう言つて勢いよく立ち上がり走り去っていく椿。

「……へファイストスも苦勞してるんだね」

「はあ……」

女神2人のそんな会話が室内に静かに響いた。

◆◆◆

椿・コルブランドと喧嘩屋の出会いはい偶然だった。

初めは店前で空腹に倒れる喧嘩屋を椿が拾い上げて中へと招いたところからだった。

親切心と言うよりも店前で倒れられていたら客が入らなくなる。そんな思いから助けていた訳だが、この時の椿の喧嘩屋に対する印象は最悪だった。

噂程度のものしか耳にしていなかったがところ構わず暴れ回る危険人物。自分の暴力という快樂のため他人に迷惑をかける、そんな男だと思っていた。

そして、丸一日寝ていた喧嘩屋。

起きてからというもののファミリア内の食料を食べ尽くさんばかりの勢いで腹へと詰め込んでいく。

遠慮というものを知らないのか。そう思う椿だったが自分の勝てる相手じゃないとは理解していたから特に何かを言うことは無かった。

そんなある時だった。

喧嘩屋が鍛冶作業のための部屋へと入った。

それはさすがに注意した。出て行けとも叫んだ。しかし、喧嘩屋は聞く耳持たずで中を少し物色する。

そんな中で手に取った一つの刀。刀身をよく見る喧嘩屋。持ち手を何度か握り、そして一言。

『良い刀だな』

その刀は椿が打っていたものだった。

まだ最上級鍛冶師マスター・スミスの称号を持っていなかった時、さらに言えばまだまだ上級鍛冶師スミスとも呼べなかつた時。

そんな時の武器を”良い”と評した喧嘩屋。こんな刀以上にいい武具は店に並んでる。しかし、それを見ても喧嘩屋はなまくらだなと言っていたのにも関わらずだ。

その時の椿は自身の才能が伸び悩んでいた時だった。故に悪態もついた。そんなものどどこがいいと。

じゃあ、と喧嘩屋。ヘアリストスの作った武器をこれで切つてやるよとそう言った。

無理だとそう思った。

へファイストス、椿の立ち会いの元試し斬りという形で用意した場。

目の前の台座に置かれたひとつの剣。へファイストスの打った武器。見るだけで最高の品だと言えるそんなレベルの一品。

しかし、それも喧嘩屋は鉄の塊だなど一言漏らした。

激高するへファイストスだったが、しかし、結果は一刀両断。

その太刀筋は鮮やかなものだったと椿は見惚れた。

『これでいいんだよ武器つてのは。他の武器は壊れないことばかり考えてる硬いだけの鉄だ。でもこの刀は違え。壊れやすいが鋭さがある。これこそ武器だ。武器を壊すなんて使い手が悪い証拠だ。おい、サラシ女。おめえ良い鍛冶師になるよ』

そんな言葉に面食らった椿。

それからは椿は喧嘩屋の認識を少し改めた。そして、もつとこの男のことを知ろうとよくつるむようになった。

そうしたら分かる新しい喧嘩屋という人物。

強さを誇示したいたための喧嘩や、自分の欲のための喧嘩はしない。いつだって喧嘩をするのは誰かのため。口は悪いが思いやりのある行動。

素直になれない、でも真っ直ぐな男なんだと理解することが出来た。

『手前が、手前自身が納得出来る程の腕になった時、手前の打った武器を持って欲しい』



そう言うのと喧嘩屋は目を見開き驚いた顔をしていた。

でも、プツと思わず笑いがこぼれる顔を見て椿は喧嘩屋も人間なんだなと感じた。

『俺が使う武器ってなったら生半可なもんじゃ納得しねえぞ』

『分かってる!』

『……楽しみにしてるわ』

「待っているカグラ……!最高の武器をお前に……!」

そう言って笑う最上級鍛冶師マスターミスの顔はとても美しかった。

## 怪物祭

ツインテポインが出て行って3日が経った。

あいつはまだ帰ってきてない。

そんな中でも兎はいつでも帰ってきてても困らないようにと今日も健気にダンジョンにお金を稼ぎに行こうとしていた。そんな時、

「銀髪のねーちゃんに財布届ける？」

「はい。シルが怪物祭モンスターフェアに行つたのですが忘れてしまつたみたいなんです。こちらでも事で手が離せないので……暇でしよう？」

「てめえは一言多いんだよ。クソが」

小首を傾げながら挑発するような目をした生真面目エルフの言葉にイラつきを覚えながらも財布を受け取る。

あの銀髪のねーちゃんがね。おつちよこちよいなところもあるみたいで。

そんなことを思っていると、

「白髪頭、白髪頭」

「え、あ、はい」

「……あの二人やつぱり出来てるのかニヤ？」

「うえ？えー、いやでも確かに仲良いような……」

「アーニヤ！」

「おい兎」

茶髪の猫人とうさぎの会話に思わず声を出した。

何を言うかと思えば……この生真面目エルフと？俺？ないない。

「こんなやつ（人）が俺（私）と釣り合うわけねえだろ（ないでしょう）。……あ？（は

？）」

「……息びったりニヤ」

「……ですネ」

「と、まあ、来たはいいが……」

「人が多いですネえ……」

あれからあのアホと別れて件の祭りにやってきたがかなりの人集り。さすがは祭りだなと思うが、

「こっからあの銀髪探すの面倒くさ」

「あはは……まあ頑張りましょう」

「……うし」

そんな声ひとつと共に持っていた財布を兎の胸へと押し付けた。

「え？」

「よろしく」

「……え!？」

慌てる兎を他所に俺はその場からトンズラ。

財布のことならあいつに任せても大丈夫だろ。そんなことよりだ。

そんなことを思いつつ別れ際に生真面目エルフから言われた言葉を思い返した。

『そう言えば私以外のメンバーが怪物祭の警備モンスターファイアで行ってるそうですよ』

久々の顔だ。

遠目から見るといいしておかんな。

……別に俺が会いたいとかそういうわけじゃないけど。

そんな誰に聞かせる訳でもない言い訳を心の中で呟きつつ建物の屋上を移動しながら見下ろす形で探してみる。

それにしても多い。

見れば見るほど人ばかり。

上から見てると言ってもこれじゃあ見つけるのはなかなか……なんてことを思っていた時、

「あ」

そんなこぼれた声を出しながら視界に入ったのは赤い髪の一人の女。

ガネーシャファミアリアの団員と話すその姿。

「変わってねえな。……んお？」

よくよく見れば近くに見える黒髪の和服の女。桃髪の小柄な口の悪いクソガキ。

その他にも見える変わらぬ顔ぶれ。笑う顔でほかの団員たちと話してる風景をこう見るとなんかこう、

「……命張った甲斐もあるってもんか」

そんな思いが溢れ出た。

さて、顔も見たし行くかと、歩き出そうとした時、

「ぬあー！お前！カグラアー！」

やべ、クソガキに見つかった。

指をこっちに指してくるそいつの声でこっちの方に顔を向けてくる”アストレア  
ファミリア”の面々。

驚く顔してるその間に俺は駆け出した。

「……は！つて、ちよつと待って！」

赤髪の声が聞こえたが無視だ無視。

捕まったらろくな事にならん。



喧嘩屋と正義のファミリアの追いかっこ。昔は恒例行事となっていたものがまたもや復活していたその頃。とある店にて2人の女神が向かい合っていた。

「——そろそろこんなところに呼び出した理由、教えてもらえないかしら？」

女神の一方、美の女神フレイヤが目の前に座るもう一方の女神にそう聞いた。

しかし、その女神は軽い口調で口を開いた。

「ちよいと久々に駄弁ろうと思うてな」

「嘘ばかり」

エセ関西弁の口調で喋る糸目の女神、ロキのそんな言葉に微笑をひとつ零すフレイ

ヤ。

フレイヤの言葉を聞きロキの顔に鋭さが浮かんだ。

「……素直に聞く。何をやらかす気や？」

「何を言ってるのかしら。ロキ」

「とぼけんなアホう。急に宴には顔だすは情報収集に余念はなさそうだわ……今度は何を企んどる」

「企むだなんて人聞きの悪い」

「じゃかあしい」

そんな女神たちのあいだには重々しい空気が流れる。お互いの視線と交差し睨み合いが続いた。

そして、数秒。無言が続く中ロキのため息がこぼれた。

「……はあ。また男か。つまり、またどこぞのファミリアの男を気に入ったちゆうわけかいな。相変わらず男癖の悪いやつちやな」

その言葉を聞きフレイヤの口角は自然と上がっていた。

「つたく、この色ボケ女神が。年がら年中盛りおつて」

「あら、心外ね。分別くらいあるわ」

「はあ、まあええわ。で？どんなヤツや、目に止まった奴つちゅーのわ」

そう言うロキの目は先程と打って変わって興味を持った子供のようキラキラとした物になっていた。

「そつちのせいで余計な気を使ったんや。聞く権利くらいはあるやろ」

「……そうね」

ロキの言葉に少し考え込むフレイヤ。

「……強くはないわ。今はまだ頼りなくて傷つきやすく、簡単に泣いてしまう、そんな子。でも、綺麗だった。透き通っていた。あの子は今まで私が見た事のない色をしてたわ。見つけたのはほんとに偶然、あの時だっけこうして……」

そう言うフレイヤの目は窓の外。何かを見つけたのか言葉が止まった。

「あん？どないし——」

「ごめんなさい。急用ができたわ」

「はあ!？」

そう言つてその場から立ち去ろうとするフレイヤ。

しかし、

「ちよい待ちな!」

「あら?どうかした?」

「最後に聞いておきたいことあったんや。……お前喧嘩屋はどうする気や?」



ロキの言葉に面食らうフレイヤ。

しかし、しばらくしてその綺麗な顔に笑みを浮かべて、

「彼は……彼はそうね。今はこのままかしらね。最終的には私のものに……違うわね。私が彼のものになるのが一番なのだけれど今これ以上を求めたら火傷してしまうわ」

そう言つて今度こそフレイヤはその場を後にした。

「……あの男も難儀なもんやなあ。なあ、アイズ」

椅子の背に体重を預け傍らに佇む金髪の女剣士にそう声をかけるロキ。

「……」

「……アイズ?」

返事のないアイズ。

たまらずロキはそちらを向いたが件のアイズは窓の外を見ていた。

「……カグラ」

「え?」

「カグラが来た」

そう言つた次の瞬間。ガラスを盛大に割る音が部屋に響き渡つた。

「うお! なんやなんや!?!」

「チッ! あのクソどもしつこすぎだろうが……あ?……糸目ペツタンとアイズか」

「おい」

入ってきたのは喧嘩屋。彼の言葉に思わずツツコミする口キ。そして外からはアストレアファミアリア。

「おめーらに構ってる暇ねーんだよ。じゃあな」

「カグラ」

「ああ!？」

慌てて走り去ろうとするカグラに声をかけるアイズ。

「また、特訓……」

「あ?……あー暇な時ならな」

「うん、わかった」

「今度こそじゃあな」

そう言って走り出そうと、

「カグラー!ーいるんでしょー!ー」

「チツ!ーうるせえなああの野郎」

そんな悪態をつき壁を破壊し出ていく喧嘩屋。

数年前の日常が帰ってきた瞬間だった。

## 喜びの再会

へお見事ッ！華麗に躲したアー！そして、攻撃！これはモンスターも屈服かア!?

——ワアアアアアアアアアアアアアアア!!!

そんな言葉が響き渡る闘技場。そして、その言葉に盛り上がる観衆。

中央に立つ1人の冒険者とモンスター。

公開調教を披露真タイムつ只中のその中に、1つの影が飛来した。

へな、なんだなんだ!?

「こほっ……こほこほ……」

困惑するアナウンスに見世物に出ていた冒険者も思わず咳き込んだ。そんな中土煙が巻き上がるその中にゆらりと映る人影。

「クソが、いつまで来んねんあの野郎ども」

手を払い除けそこから現れたのは、

へげ、げ、喧嘩屋ア!?

「っ!？」

——ッ!!??

その姿を見たその場にいたもの全員が驚愕の表情をあらわにした。

そんな中でもお構い無しとばかりにモンスターは鼻を鳴らす。狙いは今現れた喧嘩屋に。

「相も変わらなめんどくせえ女どもだな……あ？」

《ブモオオオオツ!!》

そんなボヤキを口からこぼす喧嘩屋に向かって突進しだしたモンスター。

ため息を零しつつ手のひらをモンスターに向けて、

「動かねえ方がいいぞ」

《っ!?!》

そう言う寸前で足を止めるモンスター。

喧嘩屋の目の前に立つそのモンスターの体は震えていた。

「うし、それでいい」

そんな言葉に頷くことしか出来ないモンスター。

そんなことをしていると、

「あそこだ！」

「もう逃がさないわよ！」

「フッ！」

そんな声とともに喧嘩屋の目の前に現れた3人の女性冒険者。

そのうちの一人の和服に身を包んだ黒髪の女性がその手に持つ薙刀を喧嘩屋に振り下ろした。

その刃を手の甲で受け止める喧嘩屋。

「しっつけな」

「なら、逃げなければいいだけの話だろう?」

そんな言葉をぶつけ合いつつ押し飛ばす喧嘩屋。

「あ、アストレアファミアミアと喧嘩屋の乱入!? 数年前のよく見た光景だア!」

「うるせえッ!!」

「あ……す、すみません……」

アナウンスの声に思わずと言った形で叫んだ喧嘩屋。

いつの間にかショーに出ていた冒険者とモンスタも裏手の方に下がっていた。

「たく……で? これ以上しつこく追い回してくるってんならここでボコすぞ?」

目の前に立つ3人にそんな言葉を投げた喧嘩屋。

しかし、それを聞いた3人は口角を上げ、

「出来るものなら……」

「オーケー、んじゃ……やろや」

そう言つてぶつかり合う3人と1人。

喧嘩屋を取り囲んだ3人はそのまま交互に喧嘩屋に向かつて休みなく攻め立てるが、その攻撃の悉くを素手でいなされる。

真ん中に立ち、圧倒的な不利な状況でありながら綺麗に捌き切る喧嘩屋に3人の冒険者は悔しさを持ちながらもその顔には喜びがあつた。

久しぶりに見た大恩人。その強さも存在も未だ健在ということに歓喜していた。

「ニヤニヤしてんじゃねえぞクソどもが」

「言われなくても！」

そんな言葉とともに突貫する赤髪の冒険者。

剣をかまえその先端を突き出した、が。

「……思ったより速くなつて素直にビビつたわ」

「っ！」

「けど、止められないほどでもねえな」

そう言う喧嘩屋は素手で剣の刃を受け止めていた。

その硬直を隙と見て後ろから薙刀を振るう黒髪。しかし、

「っ」

「何も言わずに奇襲は合理的だけどよ、殺気がすげえぞ？」

振り向く喧嘩屋に驚く。

そのまま喧嘩屋は手にしていた剣を引きながらその黒髪の方へと投げた。

「っ！まず……」

「ちよっ……！」

剣を離すまいと握っていた赤髪もそのまま投げられてしまい、そのまま2人は激突してしまふ。

その間に桃髪の冒険者は上から喧嘩屋へと両手に持つ剣の刃を向けていた。

「次はてめえか、クソガキ」

「っ！アタシはテメエより年上だア！」

そう言つて振り下ろされる刃。しかし、それを腰に差した刀を一瞬引き抜きそしてすぐに戻す、時間にして1秒もないそんな居合で打ち払う喧嘩屋。

「っ！」

「相も変わらず……パワーがねえな」

呆れたように声を漏らす。

その様子に目を血走らせるが、体制は崩れてる。何か出来る訳もなく崩れた体勢のまま地面落ちた。

「……満足したか？じゃあな」

3人が地面に倒れたのを確認した喧嘩屋はそう言って立ち去っていく。

ジャンプし、観客席を横切りながら闘技場の壁を乗り越えそして姿を消した。

残された3人、まさに惨敗といったものだったがその顔には笑顔があった。

「相変わらず強すぎだぜ、あの野郎」

「でも元氣そうだったわね」

「むしろもう少し自重するべきだな。あの男は」

「アストレアファミリア所属、”アリーゼ・ローヴェル”、”ゴジョウノ・輝夜”、”

ライラ”はそう言って仰向けに寝転がった。

◆◆◆

「はあ、久々にあんな走ったな……」

そんな呟きを零しつつ方を揉み、大通りを歩いていた。

そういや兎は財布を届けられたのか。まあ、俺には知ったことじゃないが。

そんなことを思いつつ前方に目を向けた時、

「ベル君！次はあっち！」

「ちよ、か、神様あ……」

兎のとツインテポインの姿が見えた。

……なるほど。俺も野暮じゃない。若い二人で楽しんでくれ。



そう思いつつ俺は踵を返して来た道に戻って行った。

兎が楽しんでる。ならば俺もということで一人で屋台を回っていること数十分。「も、モンスターが逃げ出したア!?!」  
どうやらトラブルのようだ。